
ハーフエルフの憂鬱

SMILE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフェルフの憂鬱

【Nコード】

N5121X

【作者名】

SMILE

【あらすじ】

ハーフェルフの女の子と取り巻く家族のお話です。

その1

エルフと人間の間生まれた者はハーフエルフと呼ばれる。

人間にもなれず、エルフにもなれない半端者。

それが私。ラルーニスエル

私の母親がエルフで父親が人間だった。

私の耳は、父の耳より長く母の耳より短い。

母は、とても美しい人でよく笑う自慢の母であり、父はとても優しく、なかなかの男前でちょっと浮気性でだらし無い所もあった。

酒場でお姉さんを口説く姿を母に見つかり、母が微笑みながらキッしてフルボッコにされていた。

が、次の日、ボコボコの顔をしながら「僕の愛しのエルザ！大好きだよ」

「ふふふ、私も！ティーン！」と朝から、子供達の前で堂々とイチヤつく。

父様：右手折れてますよね。というツツコミは入れずに子供達もくもくと朝食を食べるのが日常だった。

そんな父と母が大好きだったが、ハーフエルフはエルフと同じ成長速度が遅く、身体的な成長の速度が人間の5倍かかる為、見た目が

人間の10才くらいの子供に見えた頃、父は亡くなった。

母は悲しみ嘆き、一週間泣きつづけた。

父様が死んで、一週間目の朝
突然、母の泣き声が止んだ。

「皆！ついてらっしゃい」
母様は、さっきまでの意気消沈していた様子は微塵もなく、荷物を手早くまとめていた。

「か、母様何してるの？」
兄のクラスが恐る恐る聞くと、母は例のニッコリ笑顔だった。母様は、いつも笑っているが、ニッコリ満面の笑顔は、非常に怒っているなどの不吉な前兆だ！

子供達、一瞬で凍りつく。
ヒイイイ……例のその笑顔は怖過ぎます！

「デーンがいなければこの地には用がないわ。
というか思い出がありすぎて、母様泣き続けちゃう！
母様の安らかな笑顔とあなた達のためにこの家を売払って、実家に帰る事にしたのよ！」

えっ！まだ父様が死んで一週間なのに、なんて切替の速さ！むしろ世間的にまだ泣き続けるべきでは？

そんな我々兄弟の気持ちを知ってか知らずか母は、エルフの国へと私達を連れて帰った。

エルフの国のパチーノ

初めて足を踏み入れたエルフの世界。町は、白と青色で統一されており、道は魔法で青く光っている。

更に、行き交う人は皆さん美男子&美女ぞろい。

地味な顔の（対エルフ比：言い訳ではありませんが、もとの町ではかわいいと評判の兄弟でした。エルフがおかしいの！）我々兄弟は注目の的だった。

ああお家に帰りた！けどもう家もないし！

母はの実家は、エルフの国の中で貴族の地位にある家だった。

「お父様！お母様！かわいいエルザがかわいい孫達を連れて今帰りました」

母様そのテンションの高さどうにかありませんか？

ここで話は逸れますが私と兄弟達を紹介します。

長男クラス。年齢50才（見た目10才）

母様に似た顔立ちで金髪碧眼の美丈夫。

ちなみに私達は三つ子です。

同い年でもクラスは、長男の自覚を持ちすぎる程持っており、（父母があんなだったので、自分達だけでもしっかりしなきゃという長男体質）

綺麗な顔に似合わず趣味が家事と弟妹達の育児。

口癖は、「まったくもう」

頼りになる兄様です。

長女私、ラルー

三つ子の真ん中。私は、父の母つまりおばーさまに似てしまい、髪の毛は鮮やかなチェリーブロンド。つまり赤毛。目の色は、これまた母様方のおばーさまに似た紫色。

悲しい事に顔立ちも、美女ではなく普通の顔だが、珍しい赤毛と紫の目は、人目を引いてしまい、正直コンプレックス。私は赤毛のこの気持ち痛いほどわかる！

次男フィーダ。

三つ子の1番下。

髪はダークブロンドで目は黒

三つ子の中で1番最後に生まれたせいもあるかもしれないが、甘えん坊。どんな人でも上手く相手にできる天性のタラシです。しかも、上目遣いがもう父性&母性本能くすぐりまくりでフィーダのお願いを突っ張る事がでた人を私は知らない。

次女ライン40才（見た目8才）

金髪で茶色の目でこれまた母様に似た美人だが泣き虫&超ビビリ。寝る時は私と一緒にベッドに入って手を握っていなければ怖くて寝れない。

年の離れた末っ子カル3才。父様が70才の年に生まれた（元気なエロじじいな父様…）

まだほんの赤ちゃんだから皆のアイドル。茶色のくるくる巻き毛と緑の目が父様そっくり！

総勢五人の子供を連れて元気に実家の門を叩く母様！

母は強し！

扉が開くと黒髪に紫色の目をした今まで見たことが無いくらい飛び

切り綺麗な女の人が出てきた。

「エルザ？本当にエルザなの？顔をよく見せてちょうだい。」

「お母様、娘の顔忘れたの？いやだわボケちゃって！ただいま帰りました。」

母様、今この美人を「お母様」って！どうみても母様とあまり年が変わらない人だと思いますがつまり、我々のおばーさま！？

「あなたが、自分を探してきます。と訳のわからない書き置きを残して家出してどのくらい経ったと思ってるの！散々探したのに見つからないし、何を考えて……」

おばーさまがお小言を言いながらふつと目線をこちらに向けて固まった。

「エルザ！？この子供達は何！

まさか人間との間に、こ、子供を作ったの！？」

「だから、孫連れて帰ってきたって言ったでしょ！

それに、たまたま愛した人が人間だったのよ。結婚して子供を作っ
て何が悪いの？私の宝物だし、彼の大事な忘れ形見よ！」

「そんな、人間なんかと、けっけっけっ結婚ですって！」

「そう。結婚して55年経ったわ。でも、一週間前に彼は亡くなっ
た……」。

だから子供達を連れてこっちに戻ったの。魔力が安定してないから、
人間の世界にいたらご近所に迷惑がかかるしね。ここなら使いたい

放題じゃない！

お父様とお母様は孫に会えるしどっちにとっても良い話でしょ。」

例のニッコリ微笑む母様の顔を見たおばーさまは、口を開きかけたが何も言えず、最後には「ついていらっしやい。」と一言いい、私達は、今まで住んでいた家の三軒分が余裕で入る大きさの一室に通された。

その部屋は、白で統一されており、白い大理石の床と柱に白い壁。大きな窓には白いビロードのカーテンがかけられ、同じく大理石でできた大きなテーブルに白い椅子が並べられていた。

「客間でなく、会議室に通すとは、お母様も人が悪いわね…」

母様は不機嫌そう椅子に座ると膝を組み決して褒められるようなたずまいではない格好でに言い放つ。

「か、母様。私達出戻りだからやっぱり世間的にも色々あるんだと思うよ」

私は恐る恐る言った。

「何言ってるのよ。私達は血が繋がってる、れっきとした家族なのよ！世間体より家族でしょうが！」
はい、そうです。家族です。しかし、50年程家出されてましたよねっとツッコミたいのを堪える。

「ねえ、母様。お祖母様の言葉を聞いて思ったんだけど、人間って、エルフの中では蔑まれる存在なの？」
クラスが聞く。

「あ、それ俺も思った。だって俺の笑顔が通用しないんだもん！びつくりしたよ」

フィーダあなたは、黙りなさい。

「おばあ様、僕達の事嫌いなのか？」ラインがおずおずと聞くと、

「何言ってるの！」と豊満な胸に私達を力いっぱい抱きしめた。

「あんた達みたいな賢くて可愛い子達が嫌われる訳ないじゃない。

ただ、エルフってちょっと固くて自分達以外の種族を受け入れられないのよね。

本当頭固いわよ！何様なの？全くもう。

でも大丈夫！私達は家族だし、母様も側にいるからどんな事でも太刀打ち出来るわよ！」

母様それは、大丈夫と言わない。

一抹の不安をよそにお母様は、例の笑顔を見せた。

か、か、母様！ケンカだけはやめてね！お願いします。

突然、会議室の扉が開くと金髪碧眼の絵に描いたような王子様みたいな男の人が入って来た。

「エルザ。久しぶりだな」

「お父様、お久しぶりです。お母様からは、詳細はお聞きになって

ますよね？私達の事。」

…まじですか。おじーさまですか。この方が…

「ああ、聞いた。50年もの間音信不通だった上に、よりによって人間なんかと子供を作りつたお前とハーフェルフの子供の世話をしてほしいと。サルン家の恥さらしもいいとこだ。」

「恥さらしでも、なんでも事実は事実です。れっきとしたお父様の孫をハーフェルフという言葉でひとくりにしなさいで！」

私達には、お父様とお母様にすぎるしかないんです。

子供達は、本当にいい子達ばかりだわ。絶対にお父様も気に入るはずよー！」

「私は、ハーフェルフを見るのも鳥肌が立つがね。しかも、それを孫と認めるとなど虫ずが走るわ！」

「う、う、う、ウエエーン！ウエーン！「ヒック、ヒック、エエーンエエーン！ビエーン」「張り詰めた空気にカルが泣き出し、それに合わせてラインも泣き出した。」

パアーン！ガシャーン

泣き声と共に会議室にあった机や椅子が動き出し、窓ガラスが粉々に砕けていった。

クラスと私が必死にカルとクラスをあやすが泣き止まず、緊張していたクラスも「カル、泣き止んで…ヒック、な、なぎやんでええエエーン」と泣き出し、それを見ていた、フィーダまでも泣きはじ

めた。初めて自分に向けられる蔑みの眼差しと兄弟達の泣き声に私まで悲しくなり、とうとう我慢できずに泣き始め、泣き声の大合唱になった。私達の泣き声と共に屋敷全体が揺れ、壁や床が壊れはじめ一層泣き声が大きくなった。

「こ、こら泣き止みなさい！」

おじーさまが慌てて止めに入るが、一旦涙のスイッチが入った私達は、そうそう止まらない。

「ビエーン、ビエエーン！ギヤーギヤー！ウエーンウエーン」

「このままじゃ屋敷が崩れるわね。お父様！私達の面倒を見てくださるなら、止めるけど、どうする？」

平然とした顔で母様がおじーさまに聞いた。

「わかった！わかったから今すぐ泣き止ませなさい！」

「ありがとう！大好きよ」

ニッコリ微笑んだ母様は、私達の方を見ると「今から10数える間に泣き止まないと、承知しないわよ。10、9、8、7…」と笑顔で言い放つ。

例の笑顔を向けられ、条件反射でピタッと泣き声が止む。

パプロフの犬状態の私達。

ハーフェルフは、力が強いいため、感情のコントロールができない内は、魔力が暴走し、色々な事がおきてしまう。会議室は全壊していたが、なんとか屋敷は無事で済んだ。

おじーさまがよたつきながら、会議室を出ていくと、母様が

「あなた達よくやったわ！本当いい子達！これで、しばらくは安泰よ」と言ってまた私達を抱きしめた。

母様、泣いて頭がボーツとしますが、母様が喜んでるって事はグツグツジョブって事なんですかね？

その後、それぞれ各個人の部屋を割り当てられたが、今まで自分の部屋を持った事がないのと、家族が離ればなれになる事の不安から、しばらくの間、私達6人が同じ部屋になるようお願いし新たな生活が始まった。

その2

私達がパチーノに来てから、今までの生活とは、がらっと変わった。

朝、私達六人が寝ている大きなベッドに侍女三人が起こしに来てくれ、それぞれに身支度を整えてくれる。

服もいつも同じ服を着ていたのに、毎日違う服を用意される。

一度着た服は、どうなるんですか？まだ全然着れますよ！なんてもつたいたい事してるんですか！とツツコんでみたが何を言い出すのこの子は目的目線で見られ、それからは、出されるものを静かに着ている。

その後、朝ごはんを食べる食堂に移動する。

食堂には、おじーさまとおばーさまと一緒に朝食を取るが、おじーさまは、私達の事が好きではないので、全くの無視。

ところが、おばーさまはどうやら子供大好き気質のようで、最初はハーフェルフの孫に戸惑っていたが、時間が経つに連れ溺愛し、世話を焼き始め、おばーさまが口を開かない時間はない。

「クラス！顔にパンがついてますよ！おばーさまが拭いてあげるわね。

あら、カルは、お腹が空いてたのね、もうお皿が空だわ！早くおかわりを持ってきてちょうだい。

ラルー、ニンジンが嫌いなのはわかるけど、今よりもっと美人になるから一口でもいいから食べなさいね。

またラインは、お口が動いてないわよ。違うものがないなら作らせ

るから何が食べたいの？言っでごらんなさい。え？お菓子？そうですね、お皿にあるご飯食べたからクラス好きなケーキをあげますよ。ええ約束するわ！

フィーダ、肘をついてはダメよ。せっかくの男前が半減しちゃうわよ！そう、姿勢を正しく美しい所作をしていれば、あなたは素敵な紳士に見えるわ！」

おばーさまは、本当にうれしそうに私達の世話を焼いてくれるので今では皆おばーさまから引っ付いて離れない。

母様は、その光景をしたり顔で見ている。

母様、計算ずくだったんですね。っていうか、母様私達にしつけないという事は、一切してませんよね。おかげでのびのび育ちましたが、今現在教養が全く見についていないから苦労してますよ…。テーブルマナーくらいは、早めに教えおいて！

その後は、年齢別に別れ家庭教師のもとでお勉強。

カルはまだ赤ちゃんなのでおばーさまと過ごしている。

その間、母様はおじーさまとは、一緒に伯爵家の難しいお仕事をしている。

今日は、楽器の練習だ。

クラスとフィーダは、飲み込みが早く先生が稀に見る逸材と褒めているが私ときたら全くできない。

違う意味で稀にみる逸材と先生に言われてしまった。

すっかりやる気を無くしてしまい、先生にお腹が痛いから自室に戻るといい、部屋を出た。

「ラルー大丈夫？」

「クラス！大丈夫よ。わざわざ追いかけてくれてありがとう。でも、本当に大丈夫！クラスは続きをして」

「ラルー…気にしなくていいよ。魔力だったらラルーが僕らの中で一番なんだからね。音楽なんて、生きてく上では必要ないからさ」
そこまで気をまわされると余計落ち込むよクラス。

「違うの、本当に朝ごはん食べすぎたみたいでお腹痛いの。あ、でもおばーさまと母様には内緒にしてね。心配するから。」

「わかってるよ。ゆっくり休んで。」

優しい兄様だけど、その心配りが今は辛いわ。悔しいから一人でこっそり練習しようっと！

広い庭に出ると人がめったに來ない東屋がある。(この前、皆で探検した時に見つけたの)

よし、ここで練習しよう！

私はこっそり隠し持ってきた横笛を出し練習を始めた。

フウーフウーフウピーフウー

いくらやっても音がでない…

出ても的外れな高音だけだし。何故だ!?

クラスもフィードも始めからできたのに…

あたし、本当に才能ないかも…

いやいやいや、同じ兄弟なんだから私にだってできるはず!!
気を取り直して、笛を持った。

フウーフウーフウーピーフウーフウーピーフウーフウーフウー
ブフフウー

小1時間くらい練習したが、全く音がでない。

「何よこの笛!」

あまりの出来なさ加減にほとんど嫌気がさし、横笛を芝生に投げ出
した。

「プツ（笑）」

え?え?え?

誰もいなかったよね…。今。誰か笑った?

周りを見渡すと、私のすぐ後ろになんとおじーさまがいた。

「あ、あの…これは、その…」

やばい癩癩起こしたとこまで見られてた?

「お前は、なんでこんな所で笛を練習している?兄弟達と一緒にでは

ないのか？」

「あ、えっと一緒にいたんですが、二人はすぐに出来てしまい、私だけが…出来ないんです…」

ああただでさえおじーさまに嫌われてるのに、更にまた笛が苦手の癩癩持ちという嫌われ要因が加算されてしまう！

ああ私のバカこんなところで練習しようとして！

「出来ないのが悔しくて一人で練習して、更に出来なくて癩癩を起こしたのか？」

「…はい」

「フツハハハ！」

え？お、おじーさま？何がそんなにツボなの？

キョトン顔の私に散々笑いようやく落ち着くと

「私の幼い時も同じ事をしたよ。更にエルザも全く同じ事をしてた。エルザの場合は、笛を粉々にしたけどなあ。」

笛が苦手なのは我が家の伝統らしいな。散歩の途中で今日は、懐かしいものを見れた。」

そう言うと、おじーさまは屋敷の方へ戻っていった。

その3

その日の夜、皆が寝静まった頃に、仕事を終えて寝る支度をした母様がベッドに入ってきた。

「お帰りなさい、母様」

「あら、ラルー起きていたの？」

「うん、なんだか眠れなくて。」

「あらあら、睡眠はお肌にとっても必要なのよ。母様が隣に寝てあげるから、もう寝なさい。」
「そう言っただけで母様は、私の背中をポンポンとゆっくり優しく叩いてくれた。」

「うん……………」

「ねえ……………母様も横笛が苦手だったのよね？」

「は???え?横笛!??」

いきなり何の事。横笛?そうねえ昔、習った覚えがあるけどなんでまたそんな事いいたすの?」

「今日、おじーさまに聞いたの。」

私が横笛が苦手だっていつたら、おじーさまも昔、苦手で母様も苦手だったって。」

しかも三人とも癩癩起こして、笛に当たっているから、横笛が出来ないのは伝統なんだって。」

「お父様がそんな事話したの！！驚いた。まあ確かに、私、めちゃくちゃ苦手だったわ。いくら吹いても音が出ないもの。」

ラルーも似ちゃったか（笑）

ところで、お父様にいつ会ったの？」

「んーっと、お昼前くらいかな？」

「……あんの狸じじいめ、少し散歩をするってそのくらいの時間に執務室から出ていったのよね。」

そしたら、帰ってきてからやたらと朗らかになったなあと思ってたら、そんな事があったのね。」

ラルーと会った事なんて、私には一言も言わずに！

ところで、ラルー！あの狸にイジメられなかった？怖い思いしなかった？」

例のニツコリ笑顔（目の奥は、全く笑ってない）で肩を捕まれた。

母様、今が1番怖いです！

「だ、大丈夫。そんな事なかったわ！」

「そう。…なんにもなかったのね。よかった。」

母様はホツとした様子で私を抱き寄せた。

「…ねえ母様、言いくいんだけど…、おじーさまって私達の事嫌いなんだよね？」

初めて会った時なんて、私達の事見るのも嫌そうにしてたのに、今日は、そんな感じではなかったの。どうしたのかしら？」

「うーん…。私達の存在に慣れてきたって事が一番かしらね。それに、ラルーの顔だちが、どこことなく、幼い頃亡くなっただった私の兄様に似てるからかもね。」

「母様にお兄様がいたんだ！でも、私の顔は地味だから父様似なんじゃないの？母様や、おじーさま・おばーさま、みたいなエルフっぽい顔立ち（美形）ではないわよ。むしろ、顔立ちならクラスやフイーダの方がエルフ顔じゃない？」

「あら、デインは地味顔なんかじゃないわ！若い時はそれはもう美しい顔だったんだから！」

母様：私の顔が地味ってさりげなく言ってますんか？

「お兄様は、お父様のお母様、つまりラルーからしたら曾お祖母様に似てエルフには珍しく地味な顔だちだったのよね。」

しかもお兄様の瞳の色は、私のお母様に似て紫色だったの。ラルーと同じでしょ？

私が小さい頃お父様は、それは厳しくてね。もちろん、愛情があつての厳しさだったから、そんなに辛くはなかったけどね

でも、特に自分の後継ぎにするお兄様には、厳しくしてたわ。

私があんた達に厳しく言わないのは、そのせいかもね。ふふ」

いやいやいや…厳しいっていうか怖いですよ。微笑みの裏の恐ろしさってやつですか？ある意味、十分に厳しいですよ

「ある日、お兄様はお友達と遊びに行つて、帰りが遅くなつてしまつたの。」

そうしたら、お父様に「時間を守れない者は、ずっと外にいろ」つて叱られて、家から締め出されちゃつたわ。

お母様がお父様に取りなつて、1時間後くらいに、なんとかお兄様を家に入れて、夕飯の残りを食べさせてあげただけど、お腹が空きすぎて、がつついたみたいで、食べ物に詰まらせて…

その時、お母様も侍女に呼ばれて次の日、うちで開かれる事になつてた夜会の食べ物の献立を決めている最中だったから、誰も食堂にはいなくてね。見つけた時には手遅れだつたわ。」

おじ様……。つーか、話しの流れからおじーさまとの確執が何かで亡くなつたと思つてたら食べ物に詰まらせるって！

それよりなにより、いいとこのお家の子が、食べ物にがつつくてどんだけハングリーだつたのよ。

ツッコミたい事が山ほどありながら、ここはぐつと堪えた。

「お父様もお母様も歎き悲しんだけど、中でもお父様のの気の落ち込み様つたら尋常じゃなかつたわ。」

それから、感情もあまり出さなくなったわね。

それが、今日、あんなに朗らかになった理由がラルーと会ったからなんて凄いわよ！ラルー。グツジョブよ！」

グツジョブって母様…

まあ、しかし、おじーさまとの距離が少しは埋まったって事かなあ。怖いけど、もっとお話したいなあ。

そう思いながらラルーは眠りに落ちた。

その4

その後、特におじーさまから話し掛けられる事はなく、いつもの日々を送った。

「今日は、パチーノの建国記念日で街中お祭りをやっているのよ。せっかくだから、皆で見に行きましょう」

おばーさまの提案で、私達兄弟と母様とおばーさまでお祭り見物に出かける事にした。おじーさまは、お仕事だそうで不参加です。

そーいえば、昔、人間の街で暮らしてた時に謝肉祭かなにかのお祭りに一度行った事があるが、家族とはぐれてしまったフィーダがエルフと間違えられて（エルフに会った事のない人間は、エルフとハーフェルフの区別がつかないから私達の事をエルフだと思ってる人が多い…。まあハーフェルフも十分に珍しいけどね）人買いに誘拐されそうになった。

暴れるフィーダを誘拐犯が失神させて、袋に詰めようとしていたところを、父様に発見され、更に母様が誘拐犯達を半殺しにしたという凄惨な過去がある。

私達は、それ以来祭には行っていない。

久しぶりのお祭りだから、フィーダには、悪いがワクワクする！まあフィーダもトラウマにはなっていないみたい。

さっきから「クラス！わた飴とホットワインは絶対外せないよな！」

とウキウキ顔。

「お前、はしゃぎ過ぎて、またさらわれるなよ」 と冷たい目でクラスに突っ込まれていた。

しかし、フィーダはどこ吹く風。

「大丈夫だよ。俺、魔法使えるようになったから逆にぶっ倒してやる！」

「ここはエルフの国だから、みんな魔法が使える事忘れてるだろ。今回は絶対にはぐれないようにしろよ。フィーダ。」

クラスが釘をさす。

「まあまあ、クラス。フィーダだってよくわかっていますよ。

フィーダ。クラスはあなたの事を心配だからこう言っているのよ。きちんと気をつけるわよね？」

おばーさまが間に入ってとりなす。さすが、名バッファーだわ！

そうこうしているうちに馬車が広場に着いた。

いつもは、青と白で統一されている街が、目にも鮮やかな色とりどりの飾りつけをされている。

所せましと出店がひしめき合っており、エルフだけでなく、ホビットやドアーフ、ピクシーなど様々な種族の人達が店を構え 見たこともないような物を売っていた。

「トロール山の地下鉱脈で取れたオリハルコンと金細工はいらんかね？」

「妖精の粉を振り掛けた風は、どんどん上がるよ。」

「イエティが作った、アイスクリームだよ！レモン味、バニラ、ミント味、ベリー味、チョコレート味の中から選んでね」

「私達人魚の涙からできた一級品の真珠のネックレスはいかが？」

「太陽の花の蜜で作ったプティングよゝ安くするわよ」

「魔女に伝わる若返り薬はいらんかい？」

色々な種族の出店がでていて、どれも目移りしてしまうラインナップだ。

いい匂いと綺麗な品物に驚いていると、パレードの紙吹雪が舞い散ってきた。すると舞い上がった色とりどりの紙吹雪同士がくっつき、紙の小鳥になるとリロリロと不思議な泣き声をあげながら、飛んで行った。

す、すごー！！なにこれ…

凄すぎる。しかも屋台の食べ物、全部おいしそう！

そしてキレーめちやくちや楽しそう！！

私は、目を輝かせて聞いてみた

「クラス、フィーダ、ラインどれから見ようか？」

「そうだねえ。ラインは祭が初めてだよね？どれが見たいかい」

「…私、よくわからないからクラス兄様、ラルー姉様が見たい物を一緒に見たいわ。」

「それじゃ、ラルーは何が見たい？」

クラスはレディーファースト精神の固まりだから、女性や子供の意見を必ず先に聞く。
本当に優しい兄様だ

「そうね、今日は暑いからイエティのアイスクリーム食べてみたいな。」

「いいね！俺もアイス食べたいと思ってたところ！レモン味がいいな」
フィーダも大賛成。

「それじゃ、さっき貰ったおこずかいをそれぞれに分けるね。」
そういつてクラスが一人一人に硬貨を分けてくれた。

「母様達は、広場でお茶してるから、あなた達は好きな物見ていらつしやい。大きくなったからあなた達だけでも大丈夫でしょう。でも、フィーダは絶対にはぐれないようにね。言われなくてもすると思うけど、ラルーとクラスは、ラインの面倒を見てあげてね。」

母様のお許しが出たので私達四人（カルはまだ小さいからおばーさまと母様と一緒に）は、イエティの屋台へ向かった。

その5

イエティの屋台は、全て氷で出来ていた。おそらく、氷系の魔法を使っているみたいで、気温は高いのに一切溶ける事はない。

「すいませーん。レモンアイス2つとバニラとチョコ1つずつ下さい！」フィーダが元気に注文する。

「レモンアイス2つとバニラとチョコ1つずつね。」

重低音な声と共に、店の奥から真っ白な毛で覆われた人型のモフモフした巨体が現れた。

私達は一瞬固まった。

なにこれ！イエティ（雪男）って本当にいるんだ…

推定、3メートルもある人間には、生まれてこの方出会った事が無い我々は度肝を抜かれた。

「今日は、暑いからアイスクリームはきつとおいしいよ。ん！？匂いが似た匂いだから君達は兄妹だね。仲良くお食べよ。」

ガタイの割に非常に優しいイエティのおじさんは、コーン型の氷にアイスをつぶり入れてくれた。

「氷のコーンは、手で触っても溶けないし、触ってもちよーどいい冷たさにしているから冷たくて持てなくなる事はないよ。味もソーダ味にしているから食べても美味しいよ！」

そういつて、一人一人に手渡してくれた。

レモン味のアイスは、一口食べると冷たさとレモンのすっぱさと程よい甘さで思わず

「おいしいーい」と叫んでしまう程、超絶においしい！

私達は、アイスを食べながら屋台を見て回る事にした。

「レモン味のアイス超うまい！ライン、バニラ味一口、俺にちょうだい！」

「いいよ」

「こら、フィーダ！お前の一口は大きいぞ！」

「いいのよ。クラス兄様、ラルー姉様も食べてみて。おいしいから」

「じゃあライン私のレモン味も食べてみて。スッゴくおいしいよ！クラスもどうぞ！でもチョコ味も一口くれる？」

「んん！バニラうま！クラス俺もチョコ味を一口ちょうだい！」

「フィーダ私が先だから！」

「ラルー、フィーダ喧嘩しない！ラルーが先でフィーダは後だよ！」

貧乏暮らしが長かったので、回し食いが身についている私達…でも、これも楽しいんだよね。

和気あいあいとアイスを回し食いしていると声が聞こえた。

「うわぁ何あれ？」

「貧乏くさい…。有り得ないな。気持ち悪い」

前方からの声に気がつきアイスから顔を上げると、そこには顔立ちが似ている男の子と女の子のエルフの子供が立っていた。おそらく兄妹だろう。

二人ともプラチナブロンドに緑の目をして年齢的に私達と同じくらいだ。

嫌な感じ！身なりがいいから、おそらく貴族だろう。金持ちって嫌な奴が多いわ。

人間の町にいた時もそうだった。しかし、ここで金持ち相手に喧嘩をするのは、得策ではない。ひとまず、聞こえない振りをするのが絶対にベター。

気づかない振りをして通り過ぎようとすると

「あいつら、半分人間の匂いがするから、きっとハーフエルフだよ。しかもあの女の髪見てみるよ。赤毛だぜ！気持ちわる！血みたいだ」

き、貴様ら、一番コンプレックスな髪の色を非難したか…。しかも気持ち悪いと！

しかし、ここは、が、我慢…。

「私、赤毛って初めて見るわ。本当に赤いのね。女の子なのにかわいそー（笑）」

堪忍袋の尾が切れた。

「私の髪の色が何か貴方達に迷惑かけた？」

ニツコリ笑いながらバカ兄妹に近づく。

すると兄貴と思われる方が私を睨みつけ「ハーフエルフの分際で俺達に話し掛けるな！」

ほざけ、バカ男。言うに事欠いて、話し掛けるなだと？！

怒鳴りつけようとして口を開いた瞬間にニツコリ笑ったファイダが割って入ってきた。

「なあ、お前らがどのくらい偉いんだよ？人を髪や目の色や種族で判断するしか脳がないアホな奴らに俺の大切な姉貴の事を臭い口で批判しないでくれるかな？」

するとクラスは、更にファイダとバカ兄貴の間に割って入ってきた。

「赤は、綺麗な色なのに君達の目には血の色に見えるなんて、君達は、親から虐待でもされたのかい？かわいそうに。

しかも、エルフの狭い世界しか知らないのに人間を蔑みハーフエルフを蔑む事で必死に自分の地位を確率しようとかあがいているなんて…。かわいそうの一言につきるよ。これから先も必死で頑張って蔑みながらの人生をまっとうしなればならないなんて…。なんて、かわいそうな人達なんだろう。頑張ってるね」

クラス。毒舌過ぎ…。昔からクラスは兄妹達がイジメられると心臓をえぐるような言葉を相手に突き付けていたが、ここに来てもまだその習性が抜けていないようだ。

「兄様、姉様、もう行きましょ。これ以上、次元の低い人達相手にすると時間がもったいないわ。バカは死ななきゃ治らないってこの前先生から教えて貰ったの。だから、この人達に費やしている私達

の時間が刻一刻と過ぎるのが本当にもつたいないわ。」
笑顔でラインが私達を促す。

ライン…。あんたまでも…。

いずれにせよ我々は怒ると母様に似て笑顔でキレる。血はこわいわ…。

我々兄妹の笑顔毒舌攻撃にビビったエルフ兄妹は、コソコソと人込みの中へ消えて行った。

ビバ兄妹プレー！

まあ、悲しいかな私達兄妹は、（カルはまだ片言しか話せないの
別ですが…）母様に似ている部分があるんです。

血の気が多いのは、きっと遺伝です。

その6

バカ兄妹との一悶着が終わり、気を取り直して、再び屋台の探索に回った。

人魚の屋台に立ち寄ると人魚が売っている真珠は驚く程大きくて綺麗だ。

ちなみに人魚さん達は大きな水槽が屋台の売り子側に用意してあって下半身は水に浸かりながら商売をしている。

すげえ……。屋台を開く前の準備が半端なく大変そうだ。

「この髪留めララーの綺麗な髪に似合うんじゃない？」

クラスが手に取った髪留めは小さな真珠をあしらったかわいい髪留めだ。

「あ、本当だかわいい！買っちゃおうかな。値段も手頃だし」

「いいよ。僕が買ってあげるよ。おばーさまから貰ってるおこずかいも持ってきてるからプレゼントしてあげる。」

ラインには、このペンダントはどうか？似合うと思つよ。」

さすが、クラス！さっきのバカ兄妹に言われた髪の色を卑屈に思わないように、さりげなくプレゼントを買ってくれた。

なんて、よくできた兄だろう。

私は、素直に申し出を受けクラスに髪留めを付けてもらい、ライン

も小さな真珠のペンダントをフィーダに付けてもらった

「よく、似合うよ。ラルー」

「さすがクラスの見立てだな！ラルーの髪に凄く映える髪留めだよ。よかったなラルー。ラインもかわいいぜ。さすが俺の妹だ」

「「ありがとう」「私とラインは満面の笑顔でお礼を言った。

それから、サラマンダーの火の曲芸を見たり、ホビットの屋台に行ってみたりと楽しい時間を過ごした。

そうこうしているうちに、竜のパレードが始まりどっと人混みが押し寄せて来た。

「きゃあ！」

「ラルー、こっち！」

クラスが手を伸ばし、私を引き寄せようとしてくれるが人が間に何人も押し寄せ届かない。

私も一生懸命手を伸ばしてもクラスの手がどんどん遠くなり、遂に一人になってしまった。

ど、どうしよう…

人が多くて兄妹達の姿すら見えない。というか人の多さに増々押し出されてしまい、一体ここが何処なのかもわからない。

「クラス！フィーダ！ライン！」

大声を上げて、群集に掻き消されしまい、全く届かない。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

周りを見回しても、知らない場所だし、知ってる人もいない。

母様、おばーさま、クラス、フィーダ、ライン、カル！会いたいよ
ー。

心細さでいっぱいになり、涙で視界がぼやける。

いやいやいや、ここで泣いても何にもならない。とにかく皆を探さ
なきゃ！

キョロキョロと周囲を見渡しながら場所を移動していくが全く見当
たらない。

更に、小1時間くらい探し足がクタクタになったが、クラス達の姿
を見つけられない。

足が痛い…。ちょっとだけあの木陰で休んで、また探そう。

そう思つて、大きな木の下に行き座った。

「みんな、どこ行っちゃったんだろう…」俯きながら独り言をつぶ
やいてしまった。

私、相当まいってるわ…

「ねえ、君さつきから同じ所をグルグル回ってるけど迷子かな？」

いきなり声をかけられ上を向くと、人懐っこい顔をしたエルフの青
年が立っていた。

年の頃は、私より少し年上かな？人間の年で言えば13、4才くらいの黒髪、青い眼だけど、エルフにはめずらしく、眼鏡をかけていた。

「いえ、休んでいただけですから大丈夫です。ご心配なく。」

さっきのバカ兄妹の例がある。ハーフェルフは純血エルフから蔑まれる傾向が高い。

（おじーさまも初めて会った時はそうだったし）
警戒するに越した事はない。

「そんなに警戒しないでよ。しばらく君を見てたけど、ずっと誰かを探してみたいにキョロキョロしてたじゃない？家族とはぐれちゃったの？」

彼は私の前にしゃがんで視線を合わすと、警戒心を吹き飛ばすような優しい笑顔を向けた。

この人いい人かも？

いやいやいや：人さらいは、笑顔で近づいて言葉巧に相手の警戒心を解いて誘拐するって、フィードの事件があった後、母様と父様が熱弁してたわ。

ダメ！！こんな言葉に流されちゃ！信じれるのは家族だけ！

「本当に休んでいるだけですから。家族とは待ち合わせをしているだけです。あら、時間だわ！では、私はこれで…」

笑顔でそう告げると足早に立ち去った。

いやあー危なかった。しかしあいつのせいであんまり休めなかったなあ。

いや、今はクラス達を探すのが先決！頑張れ私！
痛む足にムチを打ち、さらに兄妹を探した。

…。

……。

………が………やっぱり見つからない。日も陰ってきている。母様達も心配してるかな？っていうか絶対に母様に怒られる！そっちの方が心配になってきた…

「ねえ、やっぱり君、迷子でしょ！」

いきなり肩を捕まれ振り向くと、さっきの黒髪青年が心配そうな顔をして立っていた。

「っ、つけてたの？」

怖い、何この執念深さ！まさかのストーカー？

いや、私の顔ではストーカーはないか。

「プフ！（笑）」

つけてるなんて、人聞きが悪いな。家族と待ち合わせなんていうからすぐに会うと思ってたけど、またグルグル同じ場所を歩いてたから、迷子だって確信しただけ。

顔色が悪いね。疲れただろ？

さっきね、天界人の屋台で空味の飴玉買ったんだ。食べる？

すんごく、おいしいよ。」

青年は雲のような生地できている、布を取り出し、包み開いた。

すると中から、色とりどりの飴があり、それをこちらに差し出した。見た事のない綺麗な色の飴で凄くおいしそう。そう言えば、お腹空いたわ。でも知らない人から物を貰うのってちょっとな…

飴を貰うか貰わないか躊躇していると、彼は、包んでいた布の中から1つ飴をつまんで口に入れた。

「うん、うまい！甘酸っぱくてうまいよ！夕日の味だね」

「え！夕日味！？」

夕日味ってどんな味なの？
今、どの色の飴食べた？」

「このオレンジと黄色のグラデーションになったヤツだよ」

青年は飴を再びつまむと私の口に入れた。

「ん！！！！……」

おいしーい！凄くおいしい！疲れが吹っ飛んじゃう！」

あまりのおいしさにうれしくなり、ニコニコとしばらく青年と微笑んでいた。

はっ！！いかん。お腹空いてたのと、疲れと好奇心で頭回ってなかった…。私ってば、何知らない人から、飴貰って懐いてるの！バカバカ。

「ハハハ！君はクルクルと表情が変わる子だね（笑）別に僕は人さらいでも犯罪者でもないから安心して。」

「本当に？」

「家族の名誉にかけて誓うよ。それでも信じられないなら、命をかけてもいい。」

「…わかった。あなたを信用する。私はおっしやる通り、兄妹はぐれて今、迷子なの。」

「一緒に兄弟達探してくれる？」

「やっと信用してくれた！」

「信じてくれて、ありがとう。」

「かわいい女の子の頼みとならば断れないな。顔色も少し良くなってきた！」

「今まで心細かったんだね。もう大丈夫だよ。」

「彼は笑いなが私の頭を優しく撫でてくれた。」

「この人、本当にいい人なのかも…」

その7

「さて、では早速、君の兄妹達の身体的な特徴を教えてくださいませんか？」

「身体的な特徴!？」

ええっと、兄のクラスは、金髪碧眼。弟のフィードは、ダークブロンドで目は黒。

私とクラスとフィードは、三つ子だから背丈は私と同じくらい。妹のラインは、肩までの長さの金髪で茶色の目。背丈は私の鼻くらいかな。」

身振り手振りで特徴を伝えると青年はニコリと笑った。

「よく、わかった。ちょっと待ってなよ。」

青年はパイーと口笛を吹いた。

すると、一羽の鷹が空から飛んできて、青年の肩に止まった。

「*****」

よくわからない言葉で鷹に話しかけている。

何なの一体この人?!

すると鷹はコクリと頷き、再び空に飛んで行った。

一部始終を見続けていた私はポカンと口が開きっぱなしだったよう
で振り返った青年が私の顔を見て笑った。

「アハハ！凄いやつ顔してる。さて、これでしばらくすれば兄妹に会えるから暇つぶしに屋台でも見ようか？」

狐につままれたような気持ちを抑えて青年に促され屋台を見て回った。

「あ、あそこにおいしい、雲の綿飴が売ってる！凄くおいしいからご馳走するよ。買ってくるからちょっと待っていてくれる？すぐに戻るから動かないでね」

そう言うと青年は、足早に綿飴を買いに走って行った。

本当にいい人だわ。そう思いながら青年と綿飴が来るのを待っていると背後から甲高い声がした。

「貴方達に乱暴をはたらいた者は、この赤毛なの？」

なんなの今日は！？

人の事を赤毛赤毛と呼ぶなんて。厄日か？

ギョッと睨みながら振り向くと、さっきのバカ兄妹とその親類と思われるプラチナブロンドの女の人がいた。

なんで会いたい家族には会えず二度とお目にかかりたくないバカ兄妹に会うんだろう。きっと私の今日の運勢は最悪なんだ…

「そうよ母様、このハーフェルフが私達を馬鹿にしたのよ！」

バカ妹が意地悪そうな顔をして隣に立っている女に顔を向けた。

ってことは、この甲高い声の人はバカ兄妹の母親か。道理で意地悪そうな顔してるわ

「おい、お前の汚らしいハーフェルフの兄妹は、見当たらないな？
もしかしてお前、一人なのか？さては、貧乏過ぎて捨てられたのか
？ハハツさまあみる！」

全くうざすぎるこの家族：

「スタンリード、およしなさい。ハーフェルフなんか口をきくのは。
貴方の価値が下がってしまうわ！」

なんなのよ！このクソ親子。いちいちムカつい言い方ができるとは、
凄い才能だわ。

まあ、私も今日は言われっぱなしで我慢できる程、心の許容量超えて
ますので、あえて言わせていただきます。

「なんなんですか？いちやもん付けてきたのは、そっちでしょ。こ
れ以上、私に付きまとわないでくれますか？うっとおしいにも程が
あるわ。」

お馴染みのニツコリ笑顔で返す。

「まあ、なんて下品な口の聞き方をするんでしょう。私達を辱めた
愚かさを教えてあげようとしているのに。」

あら？貴方の汚れた髪には似合わない髪留めなんてつけて。どこで
盗んだの？」

バカ妹がほざいた。マジで蹴り倒してやるつかこいつ…

そう思っていると、バカ兄貴の方が乱暴に私の髪から髪留めををむ
しり取った。絶対髪の毛が何本も抜けた！

「痛！！何するのこのクソ男、髪留め返して！」
思わずグーでバカ兄貴を殴るとそれがクリーンヒットした。

金持ちは、いじめる事はあってもケンカも何もした事がないヤツが多いから避け方も知らない。

伊達に兄弟喧嘩で鍛えてはいない私の腕っ節は、並の男の子より強い！

バカ兄貴は、私に殴られ尻餅をついた。ざまーみる！

ふつと不敵な笑みでバカ兄貴を見下ろしていると突然、強い衝撃を受け後ろに体ごと吹っ飛ばされ、背中から地面に叩き付けられた。

「クハッ……」

地面に背中をしこたま叩きつけた衝撃で少しの間息ができない。

「……！！」

いかん！！

こんなところで倒れっぱなしだと何されるかわかんない！

なんとか上体を起こして前方を見るとバカ母が私を魔法で吹き飛ばした事がわかった。

「ハーフェルフごときが私の大事スタンリードに何をするの！この愚か者！殺してやるわ」

凄じ剣幕でバカ母が怒鳴る。

子供の喧嘩に親がしゃしゃり出るか普通！つか、肩が物凄じ痛い！何これ！

今まで体験した痛さを遥かに超える激痛がして痛みでクラクラする。しかも叩き付けられた衝撃で口の中を切っており只今、口の中は絶賛鉄の味中で気持ち悪い。

そんな鉄の味を気にならなくなる程、尋常でなく右肩が痛い！どうしたのかと思いい腕を見下ろすと、あらぬ方向に右腕が曲がっていた。えええ！う、腕が折れてる…。しかもバカ母、私を殺すってなんて物騒なの？本当日は厄日って言うか命日になるの？

更にバカ母は、バカ兄貴がむしり取った髪留めを踏み付けて木っ端みじんにしてくれた。

殺す…。マジぶっ殺す…。

人の右腕折つといて、その上、クラスが私の為に買ってくれた大事な髪留めをよくも…。このクソ親子め。お前らに殺される前に殺してやる！

ゆっくり立ち上がり口の中の血を「ペッ」と地面に吐き捨て口を拭う。このクソ親子、下町上がりを舐めんなよ…ぶっ殺す！
悪意を込めた念を貯めて親子にぶつけてやろうと集中した時

「お待たせ！ってあれどうしたの？えええ！口から血が出てるよ。大丈夫？髪はボサボサだし、服に土がついてるし、何かあったの？本当にどうしたの？」

いきなり臨戦体制から引き戻され、かいがいしく世話を焼いてくれる青年が現れた。

青年は、私の服に着いた土を払おうとして、服をパンパンと優しくはたく。叩く手が右肩に触れた瞬間

「ギャー！！いったーい！」私は悶絶しながら腕を庇ってしゃがみ込む。

頭が痛くなるくらいの痛さと熱さで意識がボーッとする。

さっきまも痛かったけど、怒りでアドレナリンが出たらしく、応戦しようと思えるくらい痛みを我慢できてたけど、頼れる人が現れた途端、体は正直で痛みを全面的に感じるようになった。その上、折れた腕を軽く叩かれたら、そりゃ悶絶物ですよ。

「え！！腕が…折れてる…。ちょっと見せてみて！」

青年は私の腕を見ようとしますが、悶絶中の今は体を少しでも動かさずとすることで脳天に響く程痛いので、ただ首を横に振り「今は無理」とジエスチャーで伝えるのが精一杯だ。

「誰にやられた？」

青年は一瞬驚いた顔を見せたが直ぐさま真剣な顔をして私を抱き寄せた。

その8

「流石、人間の汚れた血が入っているハーフェルフの娘だわ。男を
そそのかして自分の庇護を得るなんて。幼いのに娼婦の振る舞いが
板についているのね。いいわ、その男共々消し去ってあげる。」

バカ母が罵声を浴びせる。

この人を人とは思わない言動。怒りと肩の痛さでクラクラするが、
言い返す気力もなく、痛みが和らぐのを待とうとして、体を青年に
預けたまま、目をギュッと閉じる。

「貴方達がこの子を傷つけ、あげく腕を折ったんですか？」

青年は私を抱き起こしながらバカ親子に厳しい目を向けた。

「この野蛮で薄汚いハーフェルフが息子を殴ったのよ！ハーフェル
フの分際でエルフの貴族に手を挙げるとは、死に値する行為だわ。
だから然るべき処置をさせてもらっただけよ。」

すると青年はため息をつきながら言った。

「子供の喧嘩に親が出てきて、あまつさえ、殺そうとするなんて、
とんだ貴族もいるもんだ。恥を知りなさい。」

低く冷たい青年の声が響く。

「ハーフェルフに騙される愚かな男が私に説教とは…。愚か者同士
仲良く死になさい！」

そう言うと、キレたバカ母は、呪文を素早く唱え手の平の中に光りの玉を作ると、それをこちらに投げつけた。

ドォーンという地の底を揺るがすような音と共に空気がビリビリと揺れる。

すると一気に上から何十倍もの重力が私達に襲い掛かり、圧死させようとする。

「キヤアー」

思わず叫んだ次の瞬間、ふっと体が軽くなる。ゆっくり目を開けると、私達の周りの地面は数十メートルに渡り陥没しているが、我々は温かな光りの中にいて何ともない。

幸い、巻き込まれた人もなく、立ち並ぶ屋台にも影響が無かったのでケガ人もいないが、さすがにここまでハイクラス魔法を道端で使ってしまうと注目の的になるが、皆バカ母が恐ろしく遠巻きで見ている。

「馬鹿な…私の最大級の呪文が止められるなんて…」

バカ母はおそらく彼女が持っている魔力を総動員して、私達を殺すための呪文を使ったらしく、力を使い果たしてしまい、立っていられず地面に膝をついた。

「母様！」

バカ兄妹が母親に駆け寄る。

バカ母は、驚きと力を使い果たした事で顔色は相当悪い。

（顔色の悪さでは、バカ母に腕を折られた私の方が確実に悪いと思うけど…）

「先程の呪文が貴方の使える最大級の呪文とは…弱すぎてかける言葉もありませんよ。」

青年が悲しい表情でバカ親子を見下す。

何この人、さつきまでの柔らかキャラとは全然違う！
なんかちよつと、怖い…

「貴方が先程、私達を殺そうとした魔法の威力は……こんなもので
すかね？」

青年は手の平にバカ母が作った光の玉を出した。見ると明らかにバ
カ母が投げて寄越した、2倍くらいの大きさだ。

「じゃあ、お返しです。受け取って下さい。」
青年は、光りの玉をバカ親子に投げつけた。

「……きゃあああ……」
バカ親子の断末魔が響く。

一瞬にして目が開けていられない激しい光が周りを包み、バカ親子
の姿は光で見えず、その周囲は、激しい光のせいで逆に闇に包まれ
た感覚を覚えてしまう。

青年……！優しい顔して親子共々消し去ったの！
いや、そりゃバカ親子だけど殺してしまうって…
あまりの事に私はワナワナと体が震えた。

「ちよつ…」口を開いた私は青年から離れた。
「殺す事ないじゃない！この人でなし。」
私が怒鳴ると青年はゆっくりバカ親子達がいた場所を指をさした。
何のことかわからずその方向を見ると

眩しさにボー然としている親子がそこにいた。

「人を殺そうとする時は、自分が殺されるかも知れない事を覚悟するものだよ。」青年は、平然とした顔で言った。

な、なんなんですか？この人は……。

その9

「あっ！！ラルー！！！！」

母様、おばーさま！ラルー発見！ラルー発見！」

今まで緊迫した空気を全く無視した、素っ頓狂なフィーダの大声と共に、母様とおばーさまとフィーダが人影から現れた。

「ラルー！ラルー！もう、どこにいったの！心配して死ぬかと思っただでしょ！！」

泣きそうな顔の母様が猛烈な勢いで走って来た。私に会う事に夢中で周りに目が行って無かつたらしく、ボー然としているバカ母を踏み付けて、私のもとまで走り、思い切り抱きしめられた。

「ギャー……！！」

腕が折れている事を知らない母様が力いっぱい抱きしめたので激痛が走り思わず白目になる。

「え！？な、何？何？何？どうしたの？」

か、母様、お願い…離して…

あまりの痛さで口をパクパクさせていると、

「あのう、お嬢さん右肩が折れているので離してあげた方がいいと思います。」

青年は母様と私の激しい再開の姿に驚き戸惑いながらも、痛みのため口が聞けない私に代わって母様に忠告してくれた。

「は????え????ラルーの腕が折れてる?.....うそ!」

そう言つて私を離して肩の様子を見る母様。

母様。母様に抱きつかれてから離されるまでの間に私、死んだ父様が綺麗なお花畑の中で元気に手を振ってる映像が見えた気がする...

「...本当だ.....。折れてる.....。.....。.....。
ラルー誰にやられたの?」

もの凄くニツコリ笑顔で母様が私に聞く。

か、母様。その前にお願ひ!!私に治療をしてえええ!
報復の前に治療を!!

「キヤー.....!」

ラルーの腕が!腕がああ!

ラルー、一体誰にやられたの?かわいいラルーにこんな仕打ちを...

ラルー、おばーさまが必ず敵をうってやるわ!」

おばーさま.....。いつも冷静沈着なおばーさまだったらまず最初に
治癒魔法をかけてくれると思つてました。

しかし、まず報復とは.....。やっぱり母様の母様だわ。根っこは同じ
血が確実に流れてる。

「ちょっとあんた!ウチの姉貴に何したんだよ!」

フィーダが敵意剥き出して青年に迫る。

「フィーダ！違うの。この人は迷子になった私にフィーダ達を探す事を手伝ってくれたり、バカ親子から守ってくれたのよ」

私は事の顛末を母様達にざっと話した。途中何度も母様とおばーさまとフィーダがバカ親子をしばこうとしたがその度に私と青年が止めだ。

これ以上、危害を加えれば本当にバカ親子は、冥土送り決定だ！言動には凄くムカつくが、殺すなんて、絶対ダメ！

「僕が懲らしめておいたので、十分ですよ。2、3日は意識がはっきりしない廃人状態が続くと思いますので、後で警備隊に彼等を保護するように言っておきますから」

母様達の怒りを見て青年が柔らかな笑顔で告げる。

マジでこの人怖いわ……

しかしウチの家族は青年の懲らしめた行為に（特に廃人にしたという部分。2、3日だからね！2、3日！！）いたく感動し、次々と青年とハイタッチをしていった。

おばーさま！おばーさまもハイタッチですか！

つか、絶対に意味わからずに母様とフィーダの姿を見て真似しただけでしょ！

あまりの事にこの光景を受け止められません、私。

「本当に娘に良くしてくれてありがとうね。感謝しても仕切れない

わ

母様が優しい笑みで青年にお礼を言った。

「僕にも彼女と同じくらい妹がいるから、一人ぼっちになってる彼女が心配になってした事ですし……」

「いいえ！貴方がいなければラルーが殺されてたかも知れないわ。本当にありがとう！感謝しても仕切れない。」

「あ、そうだ！！今度、貴方のお宅に伺って貴方のお父様とお母様に改めてお礼をさせていただくから、お名前と住所を教えてください。」

「お礼だなんて……。本当に結構です。こんな事、父に知れたら出しやばることをするなと怒られてしまいます。お気持ちだけで十分ですよ。」

「そんなあ……。私の息子達が貴方みたいに女の子を助けたら、息子の事を凄く誇らしく思うけど。ねえお母様？」

「ええ。親なら当然、息子の勇敢な行動はうれしく思いますよ。私からも心からお礼をいいます。孫を守っていただいて本当にありがとう！」

「僕の父は、残念な事に普通じゃないんです……。すみません。本当にお気持ちだけで十分ですから。それじゃ、僕はこれで！」

青年はその場から立ち去って行った。名前も名乗らぬ不思議な人だったな。自分の家族に、なるべく合わせたくない様子だったけど……

「あれ？ラルー、クラスに買ってもらった髪留めは？」

フィードに突然聞かれた。

「あ、あれ…バカ母に踏み潰されちゃった……。凄く気に入ったのに。ああ、クラスに何て言おう」

「あのクソババア！蹴り入れてやる」

フィーダが怒ってボー然としているバカ親子のもとに行こうとする。

「やめて！フィーダ！ムカつく親子だけど、今は廃人だって、あの人言っただじゃない！

何もできない相手を蹴るなんて非常識よ！」

私は必死にフィーダを止めにかかる。母様とおばーさまに目線を送り一緒に止めてもらうように催促すると

「フィーダ、やるなら早くやっちゃいなさい！」

「おばーさまは、後ろを向いていましたよね。フィーダが今からする事は、おばーさま見えなくなつてよ」

母様、おばーさま…貴方達に頼った私が馬鹿だったわ！

「ダメ！フィーダ！お願い、やめて」

私が体を張って止める

「あのう…」

ギヤーギヤー騒いでいた私達におずおずと誰かが声をかけた。

皆、その声の主を見ると、さっき去って行った青年がいた。

「言い忘れましたが、早くお嬢さんの右肩の治療をしてあげて下さ

いね。では、本当に僕はこれで…」

そう言って再び立ち去る。

腕の治療……。母様やおばーさまやフィードを止めるのに必死で痛みを忘れてた！青年に右肩の事を言われ嫌でも意識が痛みに向けられる。

「いつっ！！！！たああーい」フィードを止めるのに必死で痛めた腕を上げた為に更なる痛みが私を襲った。

痛みにも悶えながら、ぼんやり去っていく青年の後ろを見やると空から、先程の見た鷹が降りてきて青年の肩に止まったのが見えた。

おばーさまにその場で治癒魔法をかけてもらい、とりあえずの応急処置を受け、すぐに馬車を呼んで家に帰った。

馬車の中でクラス達の姿が見えないからどうしたのかと聞くと、私を探す為に、小さな子供を見ながらだと探せないの、ラインとカールを屋敷に帰す事にしたらしく、付き添いでクラスも一緒に先に戻らせたという。

屋敷に着いたら直ぐに医者を呼んで、腕の治療をしてもらった。どうやら、エルフは長寿の割には人間に比べて傷や病気に弱いらしい。

けれど、幸か不幸か私はハーフエルフの為、骨が折れてもエルフよりもダメージが少ないらしく（骨折が中々治らず死んでしまうエルフもいるみたい）骨を再生する呪文も直ぐに効いた。

まあ、効いたと言っても折れた骨が薄く、くっついているだけではない。しばらくは安静にしなきゃならないらしいけど。

しかも2、3日は骨が折れた事と治癒魔法の反動で高熱が出るとの宣言つき…。もちろん、宣言通りの高熱がでてきましたとも。ああ苦しい…

しかも私の安静を確保するため、兄妹達とは別室に移されてしまった。しかし、私が不安にならないよう母様とおばーさまが交代でずっと側に付いていてくれる。

クラス達には悪いけど、母様とおばーさまを独占したようであんなにいなあ！腕を折ったかいがあるかも。

今はおばーさまがついてくれてお昼を食べさせてくれた。

私が食べ終わってしばらくするとコンコンと部屋の扉を控えめにノックし、クラスが入ってきた。

「おばーさま、僕がラルーに付いていますからお昼を食べてください。母様は、お仕事が立て込んでしまっただけにはこちらに迎えないらしいので、僕が代わります。」

「あら、そんな時間かしら？そうね、そうしましょうか。ラルー直ぐに戻りますからちよっと待っていてね。クラス、それまでラルーの事お願いね。」

そう言っておばーさまが部屋から出て行った。

「ラルー、熱は下がった？」

心配そうな顔したクラスが私のおでこを触って熱を確かめる。

「まだ、結構あるね…。大丈夫？辛くない？欲しいものがあつたら言っただよ」

そう言いながらクラスは優しく頭をなでてくれた。

私は、クラスに対して悶々としている事を口にした。

「クラスごめんね。心配かけて…。それにせっかく買ってもらった髪飾りを壊しちゃって…。本当にごめんなさい」

「あれは、ラルーのせいではないもの。気に病む事なんて全くない

よ。また今度買ってあげるから気にしないで」

そう言っただけは優しく私の頬をなでてくれた。もうなんて優しいの！大好きな兄様だ！

「ありがとう」

私はクラスに微笑んだ。

そして、ずっと不思議に思っていた事をクラスに聞いた。

「ねえ、なんで母様達は私の居場所がわかったの？」

「実はね、ラルーと別れた後、ラルーを散々探したんだけど見つけれなかったんだ。

けど、しばらくして母様達とは出会えたから、事情を説明してる時に突然、空から鷹が降りてきて、僕達に何か言いたげに、しきりに鳴くんだよ。

最初は何なのかよくわからなかったけど、しばらくして母様が鷹の後を追ってみようと言い出して、おばーさまとフィードとで鷹の後を追って行ったんだ。

そうしたら、まさかのラルーが居たってわけ」

クラスがクスクスと笑いながら答えてくれた。

「鷹が！？」

あのね、私を助けてくれた人が鷹を呼んだと思ったら、よくわからない言葉で鷹に話し掛けた後に鷹が飛んで行って、その後に母様達に会えたの！」

興奮した私が支離滅裂の言葉で説明すると、さすが生まれた時から一緒にいたクラス！言いたい事をわかってくれた。

「……。つて事はさ、その人、鷹と話せたんだね。」

昔、読んだ本に古代のエルフは、動物と話せたって書いてあったな。だけど、今は、その能力が薄れていつてるみたいで、殆どのエルフは動物とは話せないんだ。

ただし、一部話せる人達も極わずかだけど残っているんだって。」

「へえ〜そうなの。じゃあ、あの人は珍しいエルフなんだね。」

まあ、眼鏡かけたエルフ自体今まで会った事無いから、珍しい体質なのは、そのせいなのかも。

エルフは一概に目が非常にいい種族なので人間みたいに眼鏡をかける人を私は見たことがない。

「その一部の人達はどんな人達なの？」

「動物と話せる能力を重要視して、話せない者達との交流を避けて辺境の地で少人数で暮らしている一族が数グループいるみたいだよ。まあ、古代の能力を絶やさないように血族結婚をしている人達がいるって事だよ。」

「じゃあ、私達は絶対に動物と話せる能力なんて持てないよね！」

「エルフの血が半分しかないからね。でもさあ、傷や病気に対する生命力や体力は、エルフ以上に強いんだから、それに感謝しようよ。」

「うん！」

バタバタバタ、バターン！

クラスと微笑みあっていると廊下からけたたましい音と共にカルとラインを小脇に抱えたフィーダが入ってきた。

「クラスだけラルーに会うなんてズリいーよ！チビ達だつてラルーに会いたいよな？なあ？」

フィーダの問い掛けにラインは泣きそうな顔でこちらを見る

おそらく無理矢理フィーダに連れて来られたんだろう。

「ねえたま！ねえたま！だつくうだつくう」

小さなカルがフィーダの腕から逃げようと身をもがき、私に腕を伸ばし抱っこしてとねだる。

げ、激カワ！

「カ〜ル〜！ねえたまも会いたかったよ！」

腕を固定しているのでカルの事を抱っこできない私に気を使い、クラスがカルを抱き上げた。

小さな手で一生懸命頭を撫でてくれる。

「ねえたま、いたい、いたい。どつかいった？」

ああ癒されるわあ…

「うん、カルのおかげで大分良くなったよ！ありがとう」

「姉様、早くよくなつてね」

ラインがフィーダの拘束からやっと逃れられたらしく、怪我をしていない方の手を握ってかわいい顔で聞く。

「ラインもありがとうね。もう大丈夫だよ！治ったらまた一緒に遊ぼうね」

「やっぱり、家族の力は凄いよな！ラルーの顔色が俺達が来る前より格段に良くなってる！」

フイーダがエツヘンと威張りながら言った。

「馬鹿か、お前は…ラルーの熱が上がったんだよ。」

さあ、お見舞いが済んだら早く出てけよ！ライン、カル、もうちょっと我慢してね。

そして、ラルーはちょっと寝る事！さあさあ、各自、言われた事をしっかりやる！」

クラスが仕切だすと皆、有無言わずに従わざるをえない。

私は仕方なく寝ることにした。

その11

どのくらい時間が経ったのだろう。

目が覚めると真っ暗だった。窓に目を向けるとカーテンが閉じられているから、おそらく夜だろう。きつとよく寝ているから私を一人にしてくれたようだ。

起き上がるのも億劫なので横になったまま天井を見上げる。

……。

……。

……。

さ、寂しい…誰か来てえ

暗いのは平気だけど、こつても静かだと逆に落ち着かない。

ねえ、誰か様子を見に行こうと思う人はいないの！

しかも右手を固定されているから寝返りすら打てない。

どんだけ頑丈に止めてるんだよ！少しイラツとしながらため息をついた。

早く皆と一緒に寝たいよ…

物心ついた時には、周りに必ず家族がいる騒がしい環境だったから寂しいって思うことが無かったし、逆に早く独立して一人になりたいと願っていた。

けど、いざ一人になってみると（一人といっても、今は一人で寝るだけだけど）寂しくて落ちつかない。

自分ではない誰かと一緒にいる事は私にとっては、落ちつける環境だったんだなあ。

しみじみ思っているとジワっと涙が出てきた。いかん、いかん！独り寝ごときでホームシック（？）にかかるとは…私、まだ熱が高いのかなあ。

ガチャ

扉が開いて誰かが部屋に入ってきた。

やばい！赤ちゃんでもないので泣いてた事がばれる！すかさず、目を閉じて寝てるふりをした。

コツコツと足音が近づいてきた。

誰だろう？母様かな？

うつすら薄目を開けて見てみると、そこに立っていたのは、なんとおじーさまだった。

ヒエエエー！おじーさまと二人きりになるのは、笛の稽古をサボった時以来だ！

気まずい事この上ない！寝たふりを続けて嵐が去るのを待つのみ！

心臓がバクバクしているが、それを悟られないよう、規則正しい寝息を繰り返す。

はーやーくー出てって！夜遅くにレディの部屋に入ってこないでよ！！
母様！たすけてええ！！敵が！敵が攻めてまいりました！私を避難させてください。

いくら心の中で強く念じてみても、もちろん助けが来るわけでもない。

こちらの心境に気づく事もなく、おじーさまはベッドの隣にある椅子に腰を下ろして私の寝顔を眺めている。

頭の中は警報が鳴りっぱなしでひどく動揺して焦ってしまい、私は鼻と口から同時に息を吸い

「ンゴオオ」と盛大ないびきをかいてしまった。

最…悪

ただでさえ、お祭りで迷子&一悶着を起こして腕を折り、その上に盛大ないびきをかく孫娘って…
最悪だわ。。

「驚いた。いびきまでもが、デニールとそっくりだとは…」

おじーさまは、嬉しそうに小さな声でつぶやくと、私の頬を人撫でした。

はっ？デニール？誰それ？

デニールは本物のいびきかもしれないけど、私は緊張のあまり呼吸

が乱れて結果、いびきになったただけだから！
根本がもうデニールとは違うからね！

心の中でツツコミながら寝たふりを続ける。

「デニールよ、お前は姪の姿を借りて私の元に戻ってきてくれたのか？？」

私の事を許してくれたのか…
それともまだ怒っているのか？」

おじーさまが私の寝顔に向かって小さな声で話しかけた。

何？何？何？

寝てる孫に向かって何訳のわからない事言ってきたんですか？！
何これ、無茶苦茶怖いんですけど…！！

一刻も早く、立ち去ってくれ！

その思いも虚しくおじーさまは椅子に座ったまま、私を黙って眺め続けた。

- 1時間経過 -

おじーさま、しつこいにも程があるわ！本当にお願いだから、帰って！

- 3時間経過 -

黙って人に寝顔を見続けられるって、こんなにもプレッシャーにな

るなんて、初めて知った…。辛い…

- 5時間経過 -

ねえ、これ何プレー？

- 6時間経過 -

……。死にたい…。

チュン、チュン！小鳥の軽やかな囀りと共に部屋の中に太陽の柔らかな朝の日差しが差し込み部屋を明るく染める。

「ラルー！おはようー！

昨日は仕事で相手できなくてごめんね！今日は、お父様に仕事押し付けるから母様と一日一緒にいようね！って、うわああああ！ラルーの枕元に、し、し、死神？！」

母様が元気よく朝の挨拶をしに部屋に入ってきて来ると予想しなかつたおじーさまの姿に度肝を抜かれ、黒い服を来ていたおじーさまを思わず死神と間違えた。

「何がおはようだ！

病に伏している娘をよく寝ているからと言って夜中に一人にするなんて！お前はそれでも母親か！？恥を知れ、恥を！」

「えっ！って事はお父様、ずっとラルーについていてくれたの？」

母様違う。ついていたんじゃない監視されてたのよ…

「い、いや…、さっき通りかかって様子を見てただけだ。私はもう行く。」

おじいさまは立ち上がると部屋から出ていった。

「へえ！お父様も良いところあるじゃない。

ねえ？ラルー！…ラルー？どうしたの？何シクシク泣いてるの？え？え？」

やっとおじいさまの愛情ある監視から解放たれ喜びと今までの数時間に及ぶ苦行に思わず泣けてしまった。

もちろん、この精神的なストレスでこの後、熱がしばらく続いたのはいうまでもない。

その12

やっと骨がしつかりとくつつき、お医者様から兄妹や母様と同じ部屋で寝起きをしてもいいとお許しが出たのは、新年をあと2日残した頃だった。

良い機会だからと、そのまま一人部屋を与えられそうになったが、まだいらないと断固拒否をし、晴れて昨日から狭いベッドで親子六人「州の字」で寝ていた。

ああ、この狭さから生じる密集度合いが冬場は暖かくていいのよね。フィードの寝相の悪ささえも一人じゃないと実感できて、ある意味快・感…！

侍女さん達に起こされ支度を整えると、食堂に向かう。

食堂では既におばーさまとおじーさまが定位置に座って朝食を食べていた。

「…………おはようございます」「…………」

「皆、おはよう。ラルー、久しぶりの六人一緒のベッドはよく寝れたかしら？」

微笑みながらおばーさまが聞く

「はい！ぐっすり寝れました。」

私は、元気よく答えた。

朝食が運ばれ食事を取っていると、コーヒーを飲みながら珍しくおじーさまが口を開いた。

「明日の大晦日、皆出かけるからそのつもりでいなさい」
そう言うとおじーさまは出ていってしまった。

何？出かける???どこへ？

私達兄妹の顔には「???」という表情が浮かんでいる。

「もう、クリスラー（おじーさまの名前）ったら言葉が足りないんだから…。」

おばーさまが苦笑しながらおじーさまに文句を言った。

「あのね、明日は大晦日でしょ？毎年、大晦日になると国王が貴族とその家族を宮殿に招待して、新年を祝うパーティーを開くの。当然、今年は貴方達も呼ばれているから、皆で出席しましょうっておじーさまは言いたかったのよ」

おばーさまは、私達に満面の笑みを見せながら、おじーさまの言葉の補足をした。

「えええ！まだあの新年のパーティーやってるの？
本当、国王も飽きないわね…。お父様とお母様で行ってらして。私達は、仲良くお留守番していますから！」

母様がさも嫌そうな顔でおじーさまの提案に拒否をした。

「必ず家族は出席する決まりなのよ。エルザも知っていますでしょ？
きつとお父様も貴方達を紹介するいい機会だと思っているのよ。あ
そこで貴族の面々に紹介する事で、この子達はサルン家の者と皆に

認識されるわ。

そうすれば、この前みたいな、変な輩に子供達が絡まれるのを防ぐ事ができるとお父様はお考えなのよ…。

これもお父様なりの愛情よ。わかってあげなさい」

いつになく、おばーさまの口調が厳しいので、空気がピンと張り詰めた。

「…でも…。……。」

そうだわ！私達パーティーに来ていく服なんて持ってないもの。日頃お世話になってる、お父様とお母様に恥はかせられないし…。

ああ残念だけど今年は…」
母様が嬉しそうに答えた。

「安心なさい。今日、仕立屋を呼んで、今日中に仕上げさせるように言っているから、ドレスに関しては何にも心配いらないわエルザ」

おばーさまがニッコリ微笑みながら母様の話しに被せて黙らせた。

「ぐっ…」

おばーさまのダメ押しで母様とおばーさまの攻防は、一気におばーさまに軍配が上がった。

母様…母様の負けだわ。

今回の事に関しては、おばーさまが1枚も2枚も上手です。

さすが母様のお母様だけあって母様を黙らせる用意周到ぶりに驚きを通り越して、一種の爽快感まで感じさせる。

でも正直、エルフの貴族ってあのバカ親子みたいな人達ばかりっぽ

いから気持ちとしては行きたくない。

しかし、私達が今いるパチーノの国王様かのお呼ばれなら行かざるを得ないか…

ああ気持ちが重いよ。

その13

朝食を食べ終わると私達は採寸や生地選びで一気に忙しくなった。

私達6人の服を作るべく呼ばれた仕立屋さんの数は述べ100人程。私達兄妹は、大きな部屋の一室に通されると、ほぼ下着姿に近い恰好にされ次々に体のあちこちを採寸された。ちなみに母様は、隣の部屋で母様の子供の頃から服を仕立ててくれているなじみの仕立て屋を呼んでドレスを作っている。

まあ子供用の服と大人用の服の生地も違うから、ごちゃごちゃにならないような配慮なんだろうね。

採寸が終わると私達一人一人に生地が宛がわれ、それをおばさまが見て片っ端から判断を下していった。

「クラスにはもっと深い色の方が似合うから浅黄色は却下！

うーん、カルはもっと上品で明るい色が似合うわ。そこの奥の生地を持って来て見せてみて。

……。そうね…なんかイメージと違うかしら…次の生地を持ってきて。

まあ、ライン！その薄紅色の花柄の生地は、貴方の美しさを存分に引き出すわね！その生地でドレスを作ってちょうだい！

あらあら、フィータ、じつとしてなさい。えっ？くすぐつたいの？うふふ、我慢よ我慢。男の子は何事にも我慢が肝心ですよ（笑）

あつ、ちよつとそこの貴方！ラルーは私と同じ瞳の色だから明るい
緑はやめてちょうだい、似合わないから。

あらーやだわ。だからといって髪に合わせ、赤色なんて、あまり
にも芸がなくてよ！それも無し。早く下げて。

髪の色が濃い赤だからやっぱりこの子にも深い色があつかしら。右
の生地を併せてみて！…。却下！次を見せて！」

おばーさまは、いつもの優しい雰囲気は全くなく、まるで鬼軍曹の
ようなキビキビとした指令を仕立て屋さん達に繰り出し、私達に似
合う生地を見ていく。

でも、なんかいつもより、生き生きしてる気がする

ようやく生地が決まると、次は怒涛の型選びと細かいチェックが待
っていた。

「その型でいいけど、もっとフィードの襟にギャザーを寄せて、そ
う！そんな感じね。

ラインの裾は、色を変えた方が動きがでるわ！この布に合う生地を
持ってきて！

ラルーの袖を後1cm膨らませてちょうだい

クラスの靴はもっと先が細い方がいいわね

あらーカル良く似合っているわよ！でもズボンの裾は、そんなに膨
らませないでちょうだい」

ほぼ一日中、おばーさまの指示のもと着せ替え人形状態の私達は、

全てが終わる頃には皆ぐったりと疲れ果てていた。

後で聞いた話したが、おばーさまは、結婚する前に自らのブランドを立ち上げる程にファッションセンスが大好きなんだそうだ。

おばーさまがデザインし、売り出した洋服は貴族のみならず全世界に流通し、人気を博したという。

それをおじーさまとの結婚を期に一切やめ、今では当時出した服が高値で取り引きされるほどのプレミアが付いているという。

ファッション業界から引退した今でも「サルン夫人」と言えばファッションリーダーとして注目されており、見立て上手なおばーさまは、パーティーシーズンになると貴族の奥方から見立てて欲しいという依頼が殺到し、引つ張りダコになるという輝かしい経歴の持ち主だった。

やっと大仕立て大会から解放され、夕飯を食べる頃には、疲れがピクに達し、重い身体を引きずって食堂に入ると、そこには、おじーさまがいた。

「今日は、お前達と私だけの夕食だ。さあ、食べなさい」と言い食事を促した。

しかし、本音を言えば疲れきっていた私達は、食事を取ることさえ忘れて眠りたい！

でも、そんな事おじーさまには言えないので、ノロノロと食べはじめた。

食事を始めてから1分後……

ウトウトしてスープの中に顔を突っ込む者、サラダを食べてる途中で意識を無くし口から葉っぱを出しながら寝てしまった者、パンを食べている途中で寝てしまい、パンを握りながら昇天した者、口を動かしながら寝てしまい、重心が後ろに傾き椅子ごと転がり落ちる者など、食べながら多彩な寝方を見せる子供達。

その光景を見て思わずスープを吹き出したおじいさま。

な、なんだこの子達は！？何かの呪いでもかかっているのか！？

「誰か！誰かいらないか？」

シーン……………

はっ！！そうだった！アビゲイル（おばいさまの名前）から言われていた事をすっかり忘れていた！

〓1時間前〓

「クリスラー、ちょっとよろしいかしら？貴方に折り入ってお願いがあるの……」

いつも穏やかに微笑んでいる控えめな妻から「お願い」とは……！？
おそらく結婚してから初めての事じゃないか？

「お前から、お願いとは驚いたな。私にできる事であれば言いなさい。」

アビゲイルの顔がパアツと嬉しそうに綻んだ。

久しぶりに見るその表情に思わず自らの口が綻んでいる事に気がつくくと、またいつもの固い表情を保つのに努めた。

「明日、子供達が着て行くドレスを今日中に仕上げてしまいたいので……。
腕の良い職人を手配したのだけど、この時期、どこの貴族もドレス選びに必死だから、手配できた職人の数だけでは、到底間に合わないのよ。」

だから、屋敷の者達、総出でドレスの仕上げをさせていたいただきたいんです。

もちろん、貴方達のお食事の用意はするように言っておきます。ただ、その間、子供達と貴方で夕飯を取っていただけないかしら？ エルザもまだ手が離せないから、夕飯には同席できないと思うし……。」

「別に構わんよ。」

「まあ、クリスラーありがとう！子供達も聞き分けが良いし、クラスがしっかりしているから、多分、貴方の手間を取らせる事なんてないと思うわ。」

そんな会話を思い出す。

アビゲイルよ……。

心の中で妻の名を呼んでみる。

もちろん、状況は変わらないのでため息と共に立ち上がる。

「こ、こら！頭をスープ皿から出すんだ。うっ……顔がスープだらけではないか！今顔を拭くから。はっ！！袖で拭くのはやめなさい！！」

そこのお前はいつまで、口から野菜を出しているんだ。食べないなら吐き出せ。こら！聞いているのか？ペッしなさい。

そこ！椅子から転げ落ちてもまだ寝てるなんて聞いた事がないぞ！起きなさい！

お前達！食事はもういいから部屋へ戻り寝なさい！」

シーン……………

なんだ。この子らは……。私の大声にもビクともせず寝ているとは……。こ、これがハーフエルフの力なのか？

仕方ない……。

手近なところから寝ている子供を抱き上げ子供部屋と食堂を往復し、子供達をベッドに寝かせる。すると1番小さな子供が目を覚まし寝ぐすりをしだした。

「こら、静かにしないか！お前の兄や姉が起きてしまうだろう」
しかし、幼い子供にそんな話しが、理解できる事もなく、増々激しく泣き始めた。

仕方なく、腕に抱き背中をさすってやる。しばらくすると、ヒック、

ヒックと泣き止み始めた。

柔らかい……。久しぶりに小さな子供を抱いた。

最後に子供を抱いたのはいつだったろうか……。おそらくエルザが生まれた時以来だから、数何百年は経っている。

子供特有の甘い匂いを嗅いでふとそんな事を思い出す。

ギュツと首にまわされた暖かい手と肩の凹みに押し付けられる小さな顔が庇護欲を駆り立てられる。

デニールもエルザも幼い時に抱っこをせがんでよくそのまま寝てしまっていた。

そんな遠い優しい日々を思い出すと同時にいつも心の中にある罪悪感が現れる。

「デニール……。すまなかつた。私が……。お父様が悪かつた。」
そう口から言葉がこぼれた。

すると眠ったと思っていた、幼子が目を開き

「としゃま……。だいすきよ」と言っただけに微笑みかけると安心したようにまた私の肩の凹みに顔を擦りつけ寝てしまった。

きつとこの子は、自分の父親が死んだ事が理解できずに、大人の男に抱かれて、私を父親と間違えたただけだ。

そう思いながら、涙が幾筋も頬を伝わり落ち、この子に涙がかからないよう必死で顔を背けた。

その14

私達は、泥のように寝むっていた為、朝になつても目を覚まさず、侍女さん達に起こされても中々起きれなかった。

「エルザお嬢様！クラス様！ラルー様！フィーダ様！ライン様！カール様！！！」

もういい加減起きてくださいまし。旦那様と奥様がもう食堂にいらつしゃつて皆様の事をお待ちですよ！」

何度呼んでも反応しない私達に痺れを切らした侍女さん達の大きな声で無理矢理起こされ、服を着させてもらい食堂まで連れていかれた。

寝ぼけ眼で食堂に着くと爽やかに微笑むおばーさまとちよっぴり不機嫌そうなおじーさまに出迎えられた

「あら、今日は、皆お寝坊さんね。早く席に着いて」

おばーさま…。昨日、あんなに忙しいそうにしていたのに、疲れ一つ見せないどころか、肌の艶が良くなっていて、神々しいくらい的美しさだ。きっと、自分の好きな事に夢中になると日頃のストレスも解消してしまうのだろうか。

「お母様のバケモノ…」

母様が小さな声で、呟いた。

母様が大仕立て大会から解放されたのは明け方近くになってからだという。

しかも、母様が自室に戻る時も、まだ、おばーさまは忙しいそうに働いていたらしい。

母様で無くても呟きたくなる気持ちはちょっぴりわかる。

「え？エルザ何か言ったかしら？」

穏やかな笑顔でおばーさまは母様に聞く。

「いいえ、なんでもないわ」とすかさず、母様も笑顔で返す。

おばーさまと母様って顔から性格まで本当に似ている。

「さあ皆、ご飯を食べたら昨日作った服のフィッティングをして最後のチェックをしますよ！」

その後、軽く昼食を食べてお風呂に入って新年のパーティーに行く支度をしましょうね！」

嬉しそうなおばーさまの声が響く。

「……………はぁーい……………」

私達はうなだれながら答えた。

そうこうしているうちに私達の元へ朝食が運ばれてきた。

「うまいー！いつもと同じメニューだけど、今日のは、スッゴくおいしい」

フィーダが目を細めてパンにかぶりついた。

「本当だ！凄くおいしいー！」

クラスもそれに答える。

「そうかしら？いつもと同じ味だけど…」

母様が不思議な顔で答えた。そのやりとりを聞きながら、ふと思う。

「あれ…？私、昨日夕食つて食べたっけ？？なんか昨日の夕方から記憶がないわ…。お腹も凄い空いてるし…ラインは、覚えてる？」

「……。そういえば、私も思い出せないかも。食堂までの記憶はあるけど…クラス兄様は？」

「あれ？僕、パンを食べようとしたまでは、覚えてるけど食べたんだっけ？」

「俺も、席に着いた所までしか覚えてないな」
フィーダがモグモグと口を動かしながら答えた。

「あら？あんた達、お父様と一緒に夕食食べたんじゃないの？お父様、この子達と一緒にだったのよね？」

皆の視線が一気におじいさまに集まる。

「……………」

ああ…一緒に食べた…。」

「ほら！食べたんじゃない。

疲れて記憶が曖昧になってるだけよ！聞いてお母様、この子達ったら、凄いのよ！疲れ果てて、昨日の服のまま寝てたの（笑）」

母様がコロコロと笑った。

「あら、今日の方が忙しくなるから昨日よりも、もっと疲れてしま
うかもね……。いっぱい食べなさいね」

おばーさまが明るく笑う向こうでおじーさまはどことなく居心地が
悪そうにしていた。

その15

昼食を終え、只今お風呂タイムです。

こちらの屋敷には大理石でできた大きなお風呂があり、中央に噴水のようにお湯が湧き出ていて、不思議な事に湯舟の中にお湯が流れると青白くなる。なんでも、美容によいお湯になるような魔法をかけているんだとか。

今は、母様とラインとカルの4人でゆったりバスタイム！

お風呂は、ここに来て唯一最高と思える所だ！

考えて見れば、ちょっと前までは、夏は川で水浴び、冬はお湯を絞ったタオルで身体を拭くくらいしか出来ず、初めてお風呂を見た時には大きな水瓶かと思っただ程だ。

使用法を聞いた時には、なんて贅沢品なのかと驚いたが、今はお風呂無しでは生きていけない程こよなく愛している！きっとお風呂が人なら何もかも捨てて駆け落ちできるくらい好き！
ビバ金持ちライフ！

お湯に浸かりながらうつとりしているとラインがオドオドしながら聞いた。

「ねえ母様、新年のパーティーってどんな感じなの？」

「うーん…。そうねえ…。」

予め言っておくけど、きつと私達にとっては、あまり楽しくないわね。

エルフ至上主義の貴族が殆どだから、人間と結婚した私やハーフェルフのあんた達が周りから何て言われるかは行かなくてもわかるわでもね、中には本当にいい人もいたりするから、パーティーも良し悪しね」

苦笑しながら、母様は答えた。

「じゃあ、王族の人達も感じ悪いんだ」
ため息を付きながら聞いてみた。あのバカ親子みたいな人が国のトップと思うとどんよりする。

「確かに王様は、厳格な人で何よりエルフの血を重んじる人だわ。でも、王妃様はポヤっとした、かわいい感じのいい人よ。
まあ、ポヤンとしてるかガツガツしてる者でないと王族なんてやってけないけどね」

遠い目をして母様は言った。

「私、行きたくないな…」
ラインが呟く。

「あら、パーティーに出て来る料理は、この国1番の職人が腕に寄りをかけた逸品よ！
しかも、見たこともない食材がズラリとならんで一口それを口にすると天にも登る程美味しいのよ！

し・か・も、催し物がいっぱい豪華プレゼント付き！
パーティー中ずつと流れる音楽も最高なんだから！」

母様は、おどけた表情で大袈裟に身振り手振りを加えてなんとか私達がホツとするような話を繰り出してくれた。その熱演を見たライオンは最後には「面白そう！」と笑った。

そうこうしている内にお風呂の扉の外からおばさまの声が飛んで来る。

「ちょっと！貴方達いつまでのんびりお風呂入ってるの？クラスやフィーダが待つてるのだから早く出なさい！」

「ああ…。今日は、頭のとっぺんから足の先までいじくり倒されてお母様の着せ替え人形にされるわよ。覚悟しなさいね」

母様がボソツと小声で私達に言った。

〓 3時間後〓

母様の宣言通り私達は、生きる着せ替え人形となっていた。

昨日仕立てた私のドレスは、深いワイン色のベルベットのような生地で作られており、所々に真珠が縫い付けてある。一体いくらするのこの服！

更に同じ生地と同じく真珠を縫い付けたリボンを使って頭のサイドの髪とリボンを編み混み後ろで一つの長い三つ編みのような感じにされた。

顔にはうっすら化粧までされ、全て出来上がった自分の姿を鏡で見てビックリ！

こ、これが私ですか!?

お姫様みた〜い!! 地味顔の私がここまで綺麗になれるなんて! 何
度も角度を変えて鏡を見ても、完璧にお姫様みたいだ!

嬉しくて、皆に綺麗になった私を見てもらおうとウキウキしながら
居間への扉を開け、私は仰天した。

母様……! なんて綺麗なの! 金髪に映える緑色のキラキラ輝く布で
出来たドレスで歩く度にキラキラが飛び散って消える。

胸元は大きく開いているが、嫌らしさを感じさせず逆に上品さが漂
う。

髪は横に流してエメラルドの髪飾りがまた似合う。

ラインも薄紅色の花柄のドレスに身を包みハイウエストの形が可愛
らしくラインの雰囲気ピッタリだ! サイドの髪だけ結んで小さな
薔薇で飾っている。

おばーさまなんて銀色のこれまた光り輝くドレスを纏い、髪はその
まま下ろしているが、銀の布に黒髪が映えて素敵な相乗効果を生み
出している。

デコルテには、見たこともない綺麗な青い大きな石のペンダントが
下がりおとぎの国の女王様みたいに美しい!

もちろん、クラス達だって絵から抜け出てきたような凜としたかつ
こよさだった。

私の顔でお姫様になれたんだから、元々美しい顔の人達が着飾れば、その姿は、神クラス……

身のほど知らずでした。私の自惚れた気持ちは、開始三分で跡形もなく砕け散った。

「ラルー見違えたね。いつも可愛らしいけど、今日はお姫様みたいだよ！」

「姉様！本当綺麗だわ！」

クラス、ラインやめて…本物の王子様&お姫様バりに美しい人達から褒められてもよけいに痛いから。

「あ…ありがとう。」私はヒクヒクしながら微笑んだ。

「皆、凄く似合っているわ！おばーさま霞んじゃうわね」

霞みませんって！私と並べば、むしろ引き立ちますって…

早くも私は、白目になりながら王宮に向かうべく馬車に乗った。

やばい、まだ新年会パーティーに行っていないのに、既に帰りたい…。

その16

馬車に乗り込むと、これは本当に馬車の中かと驚く程広かった。つか、広すぎだろ…明らかに外観より中の方が広い。

馬車の中は、床一面に白いフワフワの絨毯が引かれ、暖炉までついており、パチパチと薪が真っ赤になっている。

暖炉の周りには坐り心地の良さそうな、ソファーとロッキングチェア！

どうなってるのこれ！しかも、馬車の中なのに全く揺れない。

呆気にとられていると

「貴方達、王宮の馬車は初めてだったわね。パーティーに招待されると王宮から迎えの馬車が来るの。」

招待客がゆっくりできるように魔法で内装を変えているのよ」

おばーさまが説明してくれた。

ほえええ！さすが王様。やることがでかい！

驚き呆然としている間に馬車は王宮にっていた。

凄い早いなあと思いつり降りる時になんとなく馬を見るとそこにいたのは立派なペガサス……

父様、本当に何でもありませんエルフの国です。驚き過ぎて寿命が縮みまくりです。

馬車を降りると、目の前に大きな滝がドドドーっと盛大な音を立て

ながら凄い勢いで流れ落ちている。
ど、どこから入るのこれは！

「大丈夫よ。ついてらっしゃい」おじーさまが颯爽と滝の中に入っ
ていき、おばーさまがカルを抱き、母様はラインの手を引いて後に
続いた。

ねえ、何が、何処らへんが大丈夫なの！全く、意味がわかりません
が…

「ラルー、ファイダ…」。

3つ数えたら大きく息を吸い込んで入るからね！！」

クラスが意を決し、私とファイダの手を強く握った。

ゆっくりとクラスが3カウントを取り、大きく息を吸い込むと私達
は、一気に滝の中に入った。

うっ！！！！うっ？えっ？えっ？

急降下してくる大量の水に押し潰されるのを覚悟して飛び込んだの
に、水に濡れる事なんて全くなく、逆にホワツと暖かい。

滝を抜けると、いきなり明るくなり、壁も床も全て水晶で出来てい
る長い廊下に出ていた。

ゆっくり周りを見渡すと笑いを堪えている、おじーさま、おばーさ
ま、母様の顔が見えた。

「びつくりした？（笑）私も最初に来た時、凄く驚いたのよね。

あの滝はね、招待されたお客は通れるけど、そうでない人は滝に流
されて、滝壺の中に真っ逆さまっに落ちる仕組みになっているんだ

つて！」

滝壺に真つ逆さま…

どんな鉄壁の防御なんだよ。まあ、招待してない不埒な輩が簡単に入らないようにしてるのはわかるけどさ。それにしたって招待客すらビビるわ！

釈然としない気持ちで廊下を進んでいくと大きな広間に出た。

広間は、金色の水晶で出来ている床に、色んな色の火が燈っているシャンデリアが空間を明るく照らしている。

広間の正面は、数段上がっていておそらく王様と王妃様が座ると思われる水晶で出来た背もたれが長くデザインされた椅子が二脚おいてあった。

そのすぐ横には、妖精による不思議な音楽が奏でられており、更にそれより手前には長いテーブルにブラツと美しい料理が所狭しと並べられており、香しい匂いで誘う。

ファンタステック！！

その一言につきるわ。

「おや、これはサルン伯爵ではないか！久しぶりですな！

奥方も変わらずにお美しい！

ん！？君は…エ、エルザかい？驚いた！何十年ぶりだろうか…」

「これは、ミステイク公爵様お久しぶりです。お元気そうで何よ

りですわ。家出娘がこの度帰って参りましたのよ。」

母様が営業スマイルで対応する。

「君が人間の男と結婚したことは噂で知ったよ。と、するとこの子達は……」

「はい。私と愛する夫との間に生まれた天使達です。私の大事な宝物ですの」

「これは、これは……。君に似て美しい子供達ばかりだね！」

「オホホホ！自慢の子供達ですわ！」

一見穏やかに見える会話だが、このミスティーク公爵は明らかに私達を見る目が冷たい。

「ミスティーク公爵。いい機会だから、私の孫達を紹介しよう。左から、クラス、フィータ、ライン、ラルーそしてカルだ。お前達、挨拶をしなさい」

「!!!!!!!」

おじーさまが私達の事を孫って!?!しかも名前まで覚えててくれたの？

その17

私達家族は、皆あまりの驚きに口を空けたまま、おじーさまに注目した。

事情を知らないミスティーク公爵だけ「？」という顔をしていた。

「お父様！」

「クリスラー！」

「「「おじーさま！」「」「」

口々に叫びおじーさまに抱き着く。

「こ、こら！離しなさい！服が伸びる…子供達！あ、挨拶を…挨拶をちゃんとしなさい」

そこで漸くミスティーク公爵の存在に気が付き慌てて挨拶をする。

「クラスと申します。お会い出来て光栄です。公爵」

「私は、ラルーと申します。この地に来て間もないので色々ご教示願います」

「フィーダと申します。公爵様におかれましては、ご機嫌麗しゅう存じます」

「ラインと申します。お目にかかれて大変嬉しく思います。」

「かるでつ。たんたいでつ。（カルです。三才です）」

パーティーに行く前におばーさまに徹底的に挨拶の仕方を仕込まれた私達は、極上の笑顔と共にお辞儀をし、完璧なで挨拶をかましてみた。

ちなみにボロが出ないように、誰に対しても挨拶する時は毎回同じ台詞にしています…。

その姿を見たミスティーク公爵は、美しい子供達に（私を除く…）純真な笑顔と共に挨拶をされた事に、いたく感動している様子

「サルン伯爵も良いお孫さん達に恵まれ、うらやましい限りですな！」と上機嫌でその場を後にした。

ミスティーク公爵の姿が見えなくなったのを見計らって母様が口を開いた。

「お父様！ありがとうございます！この子達を認めてくれて」

「クリスラー…私からもお礼を言います。ありがとうございます！」
母様とおばーさまが涙ぐんでおじーさまに言った。

「お前の子なら、私の孫だ。当たり前前の事をしたまでだ」

罰の悪そうにおじーさまが答えた矢先にカルがおじーさまの足元に近寄ってお願いをした。

「としゃま、だっこちて」

カルあんた幼児だからといって、おじーさまにまさかの抱っこを要求とは！恐ろしい子…

やっと和解出来たからと言っても、これは流石に一足飛び過ぎるってカル！

空気読むことを身につけようね…しかも父様って！私達の父様は、お空の星になったとあれ程、言い聞かせてきたのに、おじーさまを父様呼ばわりって！

父様には、悪いけどヨボヨボじいだった父様と未だ30代後半くらいに見え、男の色気を振り撒いているおじーさまとを間違えるなんて…

「カル、僕が抱っこしてあげるから…」とクラスがおじーさまに気を使ってカルを諭そうとすると、横からカルを掬い上げるように手が伸び、カルが抱き上げられた。

「しょうがないヤツだな。ん？なんだあれが食べたいのか。よし、取りに行こう。」

今まで見たことのないくらい目尻を下げたおじーさまがカルを抱き上げて、食べ物が立ち並ぶテーブルに移動して行く。

「お母様…見た？」

「ええ…しつかりと…」

「何？あの豹変ぶり…。私の小さい頃だって、あんな顔した事なかったわよ！」

「孫は目の中に入れても痛く無いって言うけど…。何だかんだ言っても、あの人も例に漏れずに孫が可愛いのねえ…」

母様とおばーさまがヒソヒソとおばーさまの態度について話し合う。

カル…おじーさまが私達に対して作っていた壁を笑顔ひとつでぶっ壊すとは…本当に恐ろしい子！

でも、これで本当の家族になれたんだ！

スツゴクスツゴク嬉しい！

私達兄妹も顔を見合わせて笑いあう。すると、カルにケーキを食べさせているおじーさまが私達に声をかける。

「こつちにお前達の好きそうなものがいっぱいあるから、早く来なさい…」

「……はい」「」

私達は元気に返事をしてご馳走の並ぶテーブルに向かった。

ご馳走はどれも美味しく、頬つぺたが落ちそうなものばかりでさすが王宮！と思わず唸ってしまう。

「ラルー！あつちに大きな海老があつたから行こうぜ！」

「うん！クラスとラインも行こうよ」

「私はお腹いっぱいだから、母様達といるわ！」

「僕もお腹いっぱいだけど、フィーダとラルーだけじゃ心配だから、一緒に行こうかな」

何よそれ…フィーダはともかく私が心配って…内心クラスにツッコミつつ私達3人は、海老のご馳走がたんまりと乗っているテーブルに移動した。

「う、うま！何この海老料理！超うまい」

「本当！この水色ソースがこれまた海老に合うわ！」

フィーダと共に満面の笑顔で料理を食べていると

「お前達、程々しろよ」とクラスが釘を刺す。

「だって美味しいんだもん」

「…まったくもう」

呆れ顔のクラス。

すると私とフィーダの間に栗色の髪をした小さな女の子がトコトコやってくる海老料理を取ろうと手を伸ばした。

しかし、テーブルと同じ背の高さのその子では手を伸ばしても料理に届かない。

「よければお皿を貸して。取ってあげるよ」

小さな子供の世話を焼くのが大好きなクラスがたまらず、その子に言った。

「いいの？ありがとう」

直ぐにクラスは、お皿に料理を乗せてあげ女の子に手渡してあげた。

「はいどうぞ！零さないようにね」

「ありがとう！」

可愛らしい笑顔でクラスにお礼を言うと、その子は、一心不乱にバクバクと食べはじめた。

あまりの夢中ぶりにお皿を傾けてしまい、海老とソースがその子のドレスにべっとりと落ちてしまった。

「あらあら、ちゃんとお皿を持ってないとせつかくのドレスがシミだらけになっちゃう！」

私が慌てて、お皿を持ってあげ、その間にクラスがドレスに付いたソースを拭き、フィーダが半分しか食べられなかった、この子の為に新しい料理を取ってきた。

言わなくても伝わるコンビプレー！さすが三つ子だ

「ねえ君のお父様とお母様は？どこにいるの？」

クラスがその子に優しく聞いた。するとフィーダから新しい料理が乗った皿を受け取った幼女は、料理から目を離さず夢中で食べながら、「いない」とだけ言った。

いない…ですと???

私達三人は顔を見合わず。

「じゃあさ、誰とここに来たのかな？」
今度はフィーダが優しく聞く。

「ここにいるもん。ねえあれも取って！！」

料理を凄く勢いで平らげた幼女は、まだお腹が空いているらしく、料理を乗っていた皿に残っていたソースを舐めながら次の料理を催促する。

ここにいてるって？

え？この子、王宮に住んでるの???

もしかして、王族の姫君!?

いやいやいや、このガッツキぶりからしてちょっと違う気がする。

王宮で働いてる人の子?

でも、父様も母様もいないというし…

「この子…迷子なんじゃない?」

フィーダが珍しく核心を突く事を言った。

迷子!迷子の気持ちは痛いほどわかるわ!こんな小さな子が迷子なんて…可哀相に。思わず涙ぐんでしまう。

「ねえ、お名前は何て言うのかな?僕はクラスっていうんだ。君は?」

「ひゃらん」フィーダに取ってもらったパンを頬張りながら答えた。

「え?ひゃらんって言うの?」

私が聞き返すと口の中の食べ物之急いで飲み込んで言い直す。

「シャ・ラ・ン!」

「シャランちゃんか!可愛い名前だね」

クラスがシャランちゃんの頭を撫でながら言った。

「シャラン今度あれ食べたい!」

どんだけ飢えてるのこの子は…

フィーダが料理を取って行っている間にクラスと密談をする。

「どうするクラス。シャランちゃん一人にしておけないよ」

「うーん、とりあえず母様達の所に連れて行って相談しようか。僕らだけでは、手に負えないからさ」

そう言ってクラスは果物やお菓子を手に持ち、フィーダが戻るとシャランちゃんに話し掛けた。

「ねえシャランちゃん、あつちに座るところがあるから、僕達と一緒に座って食べようか。そしたら、料理を落としちゃう事もないしさ」

「うん！わかった」

クラスがシャランに手を差し出すとニッコリ笑って手を握り嬉しそうについて来た。

おじーさま達がいる所まで行くと色々な人達がおじーさま達に挨拶をするべく長蛇の列になっていた。

マジっすか！おじーさまって大人気なのね！

私達に気づいたおじーさまが

「あれが上の孫達です」と紹介され、再び例のお決まり文句の挨拶をする私達。それをキョトンとした表情で見つめるシャランちゃん。

一通り挨拶が終わり、母様達にシャランちゃんの事を話すまで15

分はかかった。

「シヤランちゃんの保護者の方が見つかるまで私達と一緒に入れればいいわ」

母様が元気よく答えた。

「シヤランちゃん、誰も取ったりしないからゆっくり食べなさい。あらあら、口にソースを付けて。拭いてあげますね。ほら綺麗になつたわ！」

おばーさまは、クラスと同じで小さい子供に目が無く、子供らしいシヤランちゃんの世話をかいいしく焼いた。

「王宮の者達に、この子を今当家で預かっている事を伝えてこよう。ん？なんだカルも行きたいと？おじーさまは、遊びでいくわけでは無いんだぞ……。」

…しょうがない子だ。」

おじーさま……。しょうがないのは、おじーさまなのでは？

おじーさまはカルを抱き、王宮の使用人の人の元へ向かった。

「ねえ、おばちゃん！シヤランね、まだ食べたいな…もうご飯やお菓子は、ないの？」

悲しい顔をしたシヤランちゃんがおばーさまを見上げる。

シヤランちゃん、あなたの胃袋は宇宙かい？どこのフードファイターなのこの子は！

「シャランちゃん、あまり食べ過ぎるとお腹を壊してしまいますよ
おばーさまが優しく諭すとグウーとシャランのお腹がなる。」

マジっすか！マジでお腹鳴ってるよこの子！

「本当にお腹が空いてるのね、この子。ラルー、シャランちゃんに、
料理持ってきてあげなさい。なるべくお腹にたまるものがいいわ」

母様に言われ、料理のブースへ行き、どれがいいかキョロキョロ見
回していたらドンと人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい」急いで頭を下げる。

「僕の方こそ、キョロキョロしてたのですみませんでした…怪我は
なかったですか？」

ん？この声…

どこかで聞き覚えがある声に顔をあげるとそこには、黒髪眼鏡のあ
の青年が正装した姿で立っていた！

「「あつ！」」

二人ともお互いを指さして固まる。

「ま、まさかこんな所で会えるなんて思ってもみなかったな！腕は
もう大丈夫？」

「え？うん！すっかり骨もくっついて元通りよ！私ハーフェルフだ
から怪我とかに強いの！」

「アハハ！そうだったね。」

でも、一瞬、君の事がわかんなかったよ。よく似合ってるよ、そのドレス」

「あ、ありがとう…／＼お世辞でもうれしいわ」

「お世辞なんか僕生まれてから一度も言った事ないよ！似合ってると思ったからそういつたまでだよ」

どこのジゴロだよこの青年は…。と内心ツッコミながら顔がにやける…いかん、こんな言葉で騙されちゃいかん！

「今日は、あなたも新年会のパーティーに呼ばれたの？」

「え！う、うん、そうなんだ…君も呼ばれたの？」

「うん、おじーさま達と一緒に招待されたの。あっ！まだ自己紹介してなかったよね？」

私、ラルー＝スエルと言います。おじーさまがサルン伯爵だから、今日一緒に招待されたんだ。」

「え！君、サルン伯爵のお孫さんなんだ！」

「おじーさまの事知ってるの？」

「え！あ、うん。サルン伯爵は有名人だからね。ここに来てる人は皆、知ってると思うよ。でも君あんまり似てないね。」

「やめて、顔の事は…傷つくから」

どいつもこいつも…平凡な顔って事くらい十二分にわかっているってんだよ！文句があるなら、明日から平凡な顔で毎日を過ごしてみ

やがれ！

身体的な特徴の事に触れられると心の奥底にいる、黒ラルーが脳内を暴れ出す！

「何の事？僕は、サルン伯爵はなんか近寄り難い感じがするけど君は親しみやすい雰囲気があるから、あんまり似てないと思ったただだよ」

「そ、そうなんだ…。あ、ありがとう」

再び赤くなってしまう。

この人天性のジゴロだわ！気をつけなくちゃ…

パンパラパンパーン

私達が話している途中でいきなりファンファーレが鳴り響いた。驚いて顔をあげると

「パチーノ王、レンジ様、パチーノ国、王妃様アキーム様がお越しになります。皆様、拍手と共に迎え下さい。」とアナウンスが流れ広間にいた人々が割れて中央に一本の道ができた。

「ラルー、ごめん。僕ちよつと行かなきゃ！会えてうれしいよ！できれば、また会って話したいな」

「え？うん、わかった！」

そう答えると青年はニッコリ笑って足早に私の隣から去って行った。

その19

は!!!

こんな所で顔をニヤつかせて、何油売ってるのよ私は…

素早く、テーブルに盛られていた料理を取ろうとすると広間が割れんばかりの拍手に包まれた!

いけない!王様と王妃様が来ちゃったよ!

食べ物持って人だかりを越えるのはちよつと無理だな…

仕方なく皿を置いた。ふと見ると、林檎がうず高く盛られていたので、赤い林檎と青林檎を1つずつ、両手で掴みタイミングを見計らって母様達の元に行くことにした。

すると人々の間を通過して王様と王妃様が壇上上がった。

「今日は皆、来てくれてうれしく思う。皆の働きに敬意を表し、家族と共に私の心ばかりの感謝の印として、今日は大いに楽しんでもらいたい」

ワアアア!!!

溢れんばかりの歓声が広間を包む。

「それと、今日正式に私の息子ベイ口の婚約を皆に発表したいと思う。ベイ口こちらへ」

再び大きな拍手鳴り渡るその中で一人の青年が壇上に登る。

え……………！
あ、あれって…
さっきの、青年！？

林檎を持っていた事を忘れて、手を口にあてようとして、林檎が落としてしまっていた。

せ、青年が王子様！？

私ってつきり、動物と話せるから辺境の地に住む一族の人だと思っ
てた…。んで、たまたま王宮に呼ばれた的な……。

まさかの辺境の民…からの王子様って！

青年は無表情で人々を見下ろしている。

「このベイルと婚約者の……」
「大変でございます！！」

バタバタと執事のような人が走ってきて、王様に一礼し、なにや耳
元で囁いた。

「本当か？ふむ…わかった。

ベイロの婚約者が体調を崩してしまったらしく急遽、皆にお披露目
ができなくなりました。

悪いが、お披露目は、体調が良くなり次第とさせてもらおう。それ
まで今夜の料理や、催しを楽しんで欲しい。」

拍手が起き、再び音楽が流れ初めてた。それをきっかけに挨拶に行
くもの、料理を取りに行くものなど、人々は、王様が来る前のよ
うに好き好きに移動をしていた。

私は、どうしても青年・ベイル王子に逢いたくて、壇上に向かった

が王子の姿がどこにも無かった。

仕方なく、トボトボと母様の所に行く

「ラルーご飯持ってきてくれた？」と元気にシャランちゃんが声をかけてきた。

「あ！ああ、ごめんね。王様のお話が始まっちゃったから取りに行けなかったの。すぐ取りに行くから、もう少し待ってて…」
「ラルー！さっきの王子見た？絶対あいつだよな！」

料理を取りに踵を返そうとした途端に目を輝かせたフィーダに捕まった。

「さっき、会ったよ…。あの人に」

「え！王子様にあつたの？すっげー呼んでくれよ！」

「偶然、会っただけだから…」

それに私もさっき初めて知ったんだもん」

ブー垂れた顔で答えていると後ろから大きな声が聞こえた。

「あ！シャラン！！ここにいたのか？」

振り返るとそこにベイル王子が立っていた。

「全く、いいと言っただけで部屋から出るなって言われただろ？皆お前の事大探してたのに…って、あっ、これは皆さんお久しぶりです…」

すると、おじーさまが王子の前に歩み出ると膝をついた

「久しぶりですな、ベイル様。先日、孫娘のラルーを助けていただ

いと先程妻から聞きました。この場を借りてお礼を申し上げます」

「顔を上げて下さい。サルン伯爵。僕は当たり前的事をしたままで
す。」

するとおばーさまがおじーさまの隣に行き膝をついた。「知らなかつた事とはいえ、ご無礼数々、お許し下さい。」

「お二人とも、やめてください。身分を隠していたのは、僕の方なんですから……」

王子は、二人の手を取ると立ち上がらせた。

「もしかして、シャランを保護していただいたのもサルン伯爵達だったのですか？」

「はい。孫達が一人になっていたシャランちゃんを見つけてウチで預かっていました。」

「そうですか……。ありがとうございます。あの、もし、よければ皆さんと少しお話したいのですが宜しいでしょうか？」

おじーさまが皆の顔を見回すと興味津々の顔が並んでいる事を知り「わかりました」と一言答えた。

「では、こちらへついて来て下さい」

王子は、シャランと手を繋ぐと広間の隣にある部屋へと私達を誘った。

通された部屋は、大きな円卓が中央にあり、壁には大きなこの世界の地図のような物が貼ってある。どうやら、会議室のみたうな感じ。

「皆さん、お座り下さい。」王子が椅子を勧める。

「ねえねえ、ベイル。シャラン、フィーダとラインとカルとで遊びたいけどダメ？」

シャランちゃんが王子の袖を引っ張り上目遣いをお願いする。
ううっ、かわいい！

「え！あ、ああ…わかった。じゃあ、この部屋の中なら遊んでもいいよ。フィーダ君、カル君、ラインちゃん。悪いけどシャランと遊んでもらえるかな？」

コクリとラインが頷きフィーダも同じように頷くと

「シャラン！何して遊ぼうか？」と笑顔でシャランとカルの手を取りラインと一緒に席を立てて行った。

「すみません…。シャランが人と遊びたいと言う事自体珍しくてフィーダ君とラインちゃんとカル君には、申し訳ないです…。」
すまなさそうな顔で王子言った。

「いいのよ。どうせ、あの子達は、じっと座ってられないもの」「あつげらん母様が言う。」

「ありがとうございます。」

実は……。シャランは、先程父が今日集まっていたいただいた方々に紹介しようとしていた僕の婚約者なんです」

「くくくエエー!!!!」「くくく」

残った一同が再び驚く。

「うちは、リアクション芸人一家か? って思うくらい素敵なリアクションで返す。」

「だって、王子も十分若いけど、シャランちゃんなんてまだカルとそんなに年が変わらないくらいの子供よ!」

母様が身を乗り出して聞く!

母様: 王子に対してフランク過ぎです。

「まあ、いつかはシャラン殿も成長する。王も、それまでは婚約者としての立場という事で見守るおつもりなんだろう。」

おじーさまが静かに言った。

「成長…ですか。皆さん、シャランはいくつだと思えますか?」

「見た目は、5才くらいに見えますが…? 精神的にも幼いように感じますので実年齢的にもまだ10才前後では?」

クラスが思案顔で言った。

「実は……シャランは、ああ見えても125才なんです。」

「くくくくくエエー!!!!」「くくくくく」

再び驚きの声をあげる私達。

「125才っていったらエルフでも見た目は、十分大人に見えるはずよ。」

母様が再び身を乗り出して言う。母様、母様が身を乗り出す度に横にいる私に胸が当たりますので座って下さい。

「実は、彼女はパレス山という山奥に住むパーム一族の長の孫なんです。まだほんの赤子の時から、両親から虐待を受けていたみたいで、満足にご飯も与えられ無かったそうです。」

そして、シャランが5才の時、母親と父親から森の中で折檻を受けていた際に魔族に襲われたそう……。なんとかシャランだけは、一命を取り留めましたが、目の前で両親が殺されたショックと虐待を受けた心の傷から大人になる事を拒否し、自ら成長を止め、更に精神的にも幼いままになってしまっているんです。」

悲しそうな顔で王子が続ける

「彼女の一族は、エルフの元種に最も近く、動物と話せ、植物を操る力を持つち、その血を重んじる為に血族結婚を繰り返していました。彼女が成長を止めたのも、その強い力の影響が出ているのかもしれない。」

そして、王族の直系も代々動物と話せる力を持っているので、その血を薄れさせないためにエルフの血を重んじる一族と代々結婚していました。

しかし、僕の代になるとシャランの他に動物と話せる女子がいなく、

シヤランの年齢を考えて父が決断したと言つ次第です」

「かわいいそうに……」

クラスがそう言つて押し黙る。

「そう言つてくれて、ありがとう。僕としても、悲しい経験しか知らないシヤランには本当に幸せになつて欲しいから、彼女が心から愛せる人と結婚して欲しいと思います。

それに、彼女は僕の事を兄のように慕つてくれてはいますが、夫になるなんて夢にも思つていないですしね。僕もシヤランの事は妹以外には思えませんし、僕だつて、本当に愛する人と一緒にになりたいと思つてるので、父の意見には従いたくは無いです。」

毅然とした態度で王子が言った。

「ベイル様のお気持ちは、王には伝えられたのですか？」

おばーさまが真つすぐに王子を見ながらいった。

「はい……。しかし、父は聞く耳を持つてはくれませんでした。王宮でのシヤランの立場は、とても危ういんです。彼女の安全を考えると、僕としても受け入れざらねばならなかつたんです。でも、シヤランの食事への欲求からお披露目の前にいなくなつてしまつて、王宮では、大探しをしていた所でした。

そんな時に、サルン伯爵から幼い迷子を保護したという連絡を受け、僕が見に行ったという訳です。」

「じゃあ、貴方は、シヤランちゃんを連れて帰つてお披露目させるの？」

堪らなくなつて、私が聞いた。

「シャランの立場を考えるとそうぜなるを得ないよ、ラルー」

悲しい顔で王子が言った。

「事の次第は、わかりました。

ねえ、あなた、シャランちゃんをウチで引き取る訳にはいかないかしら？あの子はあまりにも悲しい事しか知らないわ。

孫達と一緒にサルン家で大切に楽しくに育てれば、成長も見込めると思うの。その間にシャランちゃんが好きな人が見つければ、御の字じゃない。それがベイル様ならなおの事、いいお話でしょ？ベイル様には時折、ウチにいらしていただければ好きになる可能性も高いわ！

このまま、王家にいてもシャランちゃんが成長できるとは、到底思えないの。お願いあなた。」

おばーさまがおじーさまを見つめる。

「お父様、私からもお願い。私の娘だと思って育てるから！もちろん、分け隔ては絶対にしないわ。」

母様もおじーさまにお願いする。

「僕達も、兄妹と思って接するから！ね、ラルー！」

「うん、おじーさま！お願い！」

クラスと私がおじーさまを見つめる。

「お前達、犬や猫の子供を引き取るのとは、訳が違うんだぞ！

.....。

はあ.....。わかった。私から王に話してみよう。」

おじーさまがうなだれながら微笑むと、王子の嬉しいそつに目をきらめいた。

その21

「王宮の接見の間」

王、王妃、王子、サルン伯爵が

接見の間に入ってから、かれこれ1時間程シャランについて話し合っている。

「……ふむ、話はわかった。

しかし…サルン伯爵には悪いがその……そなたの孫は、ハーフエルフだとミステイク公爵から聞いている。

もちろん、サルン家はパチーノにおいて代々王家に忠義を持って働き、功績をあげている事は、十分承知をしているが、意地汚い人間の血が入ったハーフエルフとシャランを共に生活させるのは、どうかと思うが…。」

「父上!!!」

ハーフエルフを蔑む王の言葉に思わず、王子が声を上げる。

ビキツツツ!!!

大きな音に王と王子が振り返ると、サルン伯爵の立っている床がひび割れていた。

「「さ…、サルン伯爵?」」

「失礼致しました。私とした事が今修復を致します故…」

無表情でサルン伯爵が手を翳すと一瞬で床が元通りに戻った。

サルン伯爵の表情からは、全くわからないが静に怒っているのがドス黒いオーラで十分にわかり、一同押し黙る。

「……。。」「」

いつも、感情があるのか？と思う程、冷静沈着なサルン伯爵が、一瞬ではあるが、感情を暴走させてしまうとは……。凄いジジ馬鹿ぶりだなー！！

思わず、マジマジとサルン伯爵を見てしまう。

「王子どうかされましたか？」

「いえ……。何も……」

サルン伯爵は、コホンと1つ咳をすると王を見つめて言った。

「王がご心配なさるお気持ちはよくわかります。私も孫達に会うまでは、ハーフェルフに対して同じ気持ちを抱いております。

しかし、我が孫達は、祖父の私から見ても素直な子達ばかりです。

今日も一人ぼっちのシャラン殿を見て心配し、保護したのは孫達なのです。

孫達を見ていると、毎日の生活で兄妹達同士刺激をしあい成長をしています。

兄妹達の中で負けたくない、追いつきたいという気持ちから、昨日できなかった事が今日できるようになり、次の日はもっと多くの事ができるようになって、大人の私達が日々驚かせられています。

恐れながら、ここ王宮ではうちの孫のような子供はおりません。孫達と一緒に生活する事は、シャラン殿への良い刺激に必ずなるかと思えます。」

「うーむ…しかし…」

「私は、サルン伯爵に賛同致します。」

王妃がニツコリ微笑みながら発言した。

「サルン伯爵は、実直な方ですね。その方の自慢のお孫さん達と一緒に育つ事は、あの子にとっても必ずプラスに働くはずですよ。」

王宮にいても、私達は公務が忙しくあの子にはそんなにかまっていられない。少しでも可能性があるのであれば、私はそれに賭けてみたいです。ね？あなた。」

王妃は、少女のようにたおやかに微笑みながら首を傾げて王をみる。

母上のお願いポーズが出た！これは十中八九決まる！

「……………う……………ううう」

「はあー。仕方ない…サルン伯爵、シャランを受け入れてくれるか？」

「はい。喜んでお受けいたします。しかし王、前もって申し上げておきますが、私や、妻や娘は、シャラン殿を特別扱いは致しません。自分の家族と思って接しますので、叱らなければいけない時は孫達と同じように叱りますので、その点は、ご了承願います。」

「わかった。しかし、シャランが新しい生活の中でベイルの事を忘れる事が無いように月に一度ベイルがサルン家を訪れる事としよう。」

よいか？ベイル？」

「ありがとうございます。父上。」

「また、シャランがサルン家にいる期間は、ベイルが成人するまでとする。」

「わかりました。ありがとうございます。では、家族達に話してまいります。」

サルン伯爵は、膝を付き頭をさげると接見の間を静に後にした。

〓その晩〓

「シャラン、クラス兄様と母様の隣がいい！」

シャランは目を輝かせてクラスと母様の隣の布団に潜り込んだ。

「シャラン、ずるい。私だってそこがよかつたわ。今日だけよ！」
ラインがクスクス笑いながらシャランをからかう。

「えへへ！ありがとうございます。明日はライン姉様とラルー姉様の間で寝たいな！」

「あら、フィーダでなく、私を選んでくれてありがとうございます！」

「ちえ！明後日は俺の隣な？シャラン。」

「うん！」

ニッコリ笑顔のシャランが元気よく頷く。

おじーさまが王様達とのお話が終わって、シャランを引き取る事になったと私達に告げた。

そして、今日からシャランは、私達の兄妹だと思って接しないと伝えた。そして、シャランには今日から家族になったのだから、おじちゃんではなくおじーさまと呼びなさいと話した。

「おじーさま？」

キョトンとした顔でシャランが言った。

「そうだ。今日から私はシャランのおじーさまだよ」
そう言うとおじーさまは、ニッコリ笑ってシャランの頭を撫でた。

「私は、シャランのおばーさまですよ。よろしくね」

「おばーさま？」

おばーさまが笑顔でシャランを抱きしめる。

「そして、私が母様よ！」

母様がシャランを抱き上げてクルクル回ると最初はびっくり顔のシャランが母様に抱き着きうれしそうに笑い声をあげる。

「シャランは、ラインより小さいからラインの妹だな！ライン妹ができてよかったな！シャラン、カルはお前の弟だから、面倒みてあげなよ」

フィーダが母様からシャランを受け取ると高い高いをした。

「うん！シャラン、カルの面倒みる！」

「シャランは偉いね。カル、シャラン姉様だよ」

「ちゃらんねたま？」

カルが首を傾げながら言った。

こうして私達は9人家族となった。

「シャラン、嬉しいのはわかるけど、今は寝る時間よ！皆も早く布団に入る！」

母様が優しくシャランを諭すとシャランの背中をゆっくりポンポンと叩く。同じベッドで寝ている私達にも優しいその振動が伝わりいつしか皆、寝息をたてていた。

その22

「シャラン、お口に食べ物が入ってる間に違う物を口に入れては、ダメよ。ポロポロ、口から出ちゃうでしょ？ ゆっくり噛んで飲み込んでから、次の食べ物をたべるのよ」

「モツモ、モゴモゴモ！」

「口に食べ物が入ってる時にはしゃべらないの！ ごっくんしてから喋ってね。」

シャランが来てから、大人しかったラインは、すっかり成りを潜めお姉さんぶりを発揮している。その姿を周りがおかしそうに微笑みながら見てるのをラインは気づかない。

まぐまぐ…ごっくん！「だって無くなっちゃうかも知れないもん。」

「誰もシャランの食べ物を取らないから安心してゆっくり食べなさい」

母様がシャランの顔についた食べ物を指で取って、自らの口に運んでパクつと食べながら言う。

シャランがウチに来てから2週間が経った。すっかりウチにも馴染んで、今じゃフィーダに並ぶ暴れん坊ぶり。

だけど、時々夢で昔の怖かった思い出が蘇ってくるのか、泣きながら「ごめんなさい、ごめんなさい」と、うわごとのように繰り返す事があるって、その度、母様が、シャランを胸に抱き、「大丈夫。母様がここにいるからね」と言いながら、ゆっくりシャランを揺らす

と再び安心したようにスーッと寝る。

「きつとシャランはね、昔の自分と必死に戦ってると思うの。もし、母様が仕事で遅くなつてシャランが泣いてる時に間に合わなかったら、あんた達しっかり面倒みてあげてね！」

母様から上、三人にお願いされたけど、私とクラスは言われなくてもやりますよ。

フィードは、寝ちゃってて起きないけどね…

「クラス達は今日は何をするの？」

おばーさまがお茶を飲みながら尋ねた。

「僕らは、剣の稽古です。そうだ、おばーさまからも言つて下さい！ラルーも剣の稽古をするって言い出したんです。女の子には、危険でしょ？何かあつても僕とフィードが守るって言ってるのに聞く耳持たなくて…」

「だって、クラスやフィードがいない時に危険な目にあつたらどうするのよ！ましてや、ラインやシャランやカルだけしかいなかったら私が守るしかないでしょ？」

「フフツ。クラスは貴方の事を心配して言ってるのよ、ラルー。でも、ラルーの言う事も一理あるわね。守られてばかりではいざって時には何も出来ないもの」

おばーさまがニコニコ笑つていう。

「ウホン、ラルー…剣を知るのは良いが、危ない事は程々にしてお

きなさい。」

おじーさまが真面目な顔で言う。

「はぁーい。でも少しだけならいいでしょ？おじーさま？」

「ま、まあ少しだけならな…」

「父様つたら、ラルーとカルには甘いんだから！」

母様がおじーさまをからかう。

「ねえラルー姉様、シャランも剣のお稽古してみたい！ライン姉様も一緒にしよー！」

「えっ！剣の稽古？…私、怖いわ…」

珍しく昔の気弱なラインが顔を出す。ラインは、本当に怖いみたいで顔が引き攣っている。うーん、根っからの女の子でかわいいわ！ライン。

でも、ラインの姉様としての威厳も立たせてあげたいし…

「シャランがもう少し大きくなったら一緒に剣の稽古しようね」

「わかった…シャラン早く大きくなる！」

「！」

大人三人が顔を見合わせる。

こんなにも早くシャランの成長を望む言葉を聞けるとは…。

「やはり、子供は、子供の中にいるのが成長の1番の近道なんだろうな…」

「ええ、本当に…」

「おじーさま、おばーさま、何のお話？」
不思議な顔でシャランが聞く。

「いえいえ、何でもないのでよ。ほら、シャランもっと食べなさいね。」
「
おばーさまがシャランのお皿にサラダを乗せるとシャランは嬉しそうな平らげていった。

それから、年長の私達は剣の稽古に、ラインとシャランは歴史のお勉強、カルは積木とそれぞれの課題を行った。

「ラルー様、筋がいいですね。次は上段からの突きを100回素振りをしましょう」

華奢な体つきの家庭教師トラック先生が微笑みながら言う。

マジツすか！結構フラフラなんですけど！？

この先生は、教え子の限界＋までの練習をさせるので教え子は皆上達が早いと評判の先生だけど……キツイわー。

ちよつと筋が良いと褒められた事にいい気になってました。ごめんなさい…

「せ、先生……、ちよつと休憩をしませんか？」

休みたいと思ってた所にバテバテのフィードがタイミングよく提案してくれた！

ラッキー！

「それじゃ、各々に与えられた課題が終わったら休憩して、その後手合わせしてみようっか？」

トラック先生が微笑みながら言う。

先生の鬼ー！！！！

皆の心の声が聞こえた気がする…。

やっと課題が終わったー。ああ疲れたよ。っーか口聞けないくらい体力消耗した。

フラフラと木陰を目指して我々三人がよたつきながら歩き、ドサッと腰を下ろす。

フィードなんか俯せでお尻だけ上げた間抜けな格好だから、同じく疲れきっているクラスと私は、は突っ込む事さえできない。

「ププ！三つ子ちゃん達トラックに相当やられたね！大丈夫かい？」と、後ろから笑い声が聞こえた。

私達は顔だけあげて声の方を見るとそこにはベイル王子がクスクス笑いながら立っていた。

その23

「「「ベイル王子!?!」」」

「さすが三つ子だね。息ピッタリだ!」

私達は、慌てて膝をつく。

「あ、そうゆうの王宮で無いところでは、やめてよ!王子って呼ぶのも、ベイル様って呼ぶのも禁止ね!」
笑顔で王子がいう。

「え…、じゃあ何て呼べばいいんですか?」

「ベイルでいいよ。それに敬語も王宮以外では禁止ね!シャランに対して兄弟みたいに接してくれてるなら、僕とは友達として接してくれないかな?」

ベイルが上目遣いで聞く。

「でも…」

「ダメかな…」

とても悲しい顔で王子がうなだれ捨てられた子犬のような目で私達を見る。

ズキーン

なに、この罪悪感は何?

やめて、そんな目で見ないで〜!クラスとフィーダの顔見ると同じく罪悪感に苛まれている顔をしている。三人で顔を見合わせコクリ

と頷いた。

「わかりました…いや、わかったよ、ベイル」

私がこう言つとベイルは満面の笑顔になつて私を抱きしめた。

「ありがとうラー！」

「うきや！」

ち、近い…近いっつーの！

「こほん、ベイル！ラーから離れて！ラーが困ってるからクラスが間に入ってベイルを止めてくれた。」

「え？ああごめんね。嬉しくてつい…／＼／」

「それより、なんでウチにいるの？」

「月に一度シャランの様子を見に行くつて父上と約束してるんだ。あれ？サルン伯爵から聞いてない？」

さつきシャランの様子を見たけど、文字を書くのに必死で僕の事なんて眼中になさそうだったから、読み書きが終わるまで君達の剣の稽古でも見てきたらつて君達のお祖母様に言われてね。」

「そうだったんだ。」

クラスが思わず言った。

「ねえ、僕もしばらく剣を握つてなかったから一緒に稽古していいかな？」

「え！ベイルが？だってベイル相手に怪我させたら、王様黙ってないよ！」

「大丈夫だってフィーダ！君らより剣を扱い慣れてるから、昨日、今日始めたヤツには負けないよ！」

カラカラと笑うベイルに対し私達の鬪争心に火が付いたのは言うまでもない。

やってやるーじゃない！

カン、カンカーン！木刀が打ち合う甲高い音が響き渡る。

私が上段から振り下ろした木刀をベイルが片手で振り払う。返す刀で足を振り払おうとした下段から木刀を振り上げるとベイルがヒラリとジャンプをし、ギリギリの所でかわす。

「ハアハア、ラルー！やるね！」

「ゼーゼーゼー、そ、そっちこそ…」

ベイルは、最初にクラスと、次にフィーダと手合わせして、ことごとく打ち負かせているが、流石に三人目ともなると、息があがっている。が、散々打ち込ませられ続けている私の方がフラフラだ…

しかーし、絶対に負けない！

木刀の切っ先をを地面にあてながら、振り上げて土をベイルに浴びせた。不意を疲れたベイルの目に土が入り、怯んだ拍子に上段から

木刀を振り下ろす。

もらった！

そう思った瞬間にベイルが私の目の前に移動し、私の木刀を片手で掴み、もう片方の手の中にある木刀を私の首に宛てた。

「引っ掛かった！本当は、土は目に入らなかつたんだ」

「騙したのね？汚いわよ」

「ラルーだって汚い手を使ったからお互い様だよ！」

ベイルは、肩をすぼめて笑いながら答えた。

「次、僕と手合わせして！」

「クラスずるい、次俺としてよベイル！」

「ハハハ！君達は、本当に負けず嫌いだね。それじゃ順番ね。ラルーの前にフィードとやったから、今度は一回まわってクラスとね！」

「貴方達、ベイル様が疲れてしまいますよ。今日はこれまでね。トラック先生、ありがとうございます。ベイル様シャランのお勉強が終わりましたので、皆でお昼にしましょう。」

いつからそこにいたのかわからないが、おばーさまの鶴の一声で私は、昼食を食べに食堂へ行った。

「ベイル！なんでウチにいるの？」

嬉しそうなシャランがベイルに飛びつく。

「ウチか…。そうか、そうだね。シャラン、大切にしてもらってるんだね」

優しい顔でベイルがシャランの頭を撫でる。

「うん！シャラン家族ができたのよ」

「そっかあ、よかったね」

「うん！一緒にご飯食べよう」

ウチの昼食は、ある意味戦争だ！

「クラス！サラダのお皿取って」

「カル！パン食べなさい」

「いやあなの」

「おかわり！」

「フィーダ兄様、取らないで！」

「お口が動いてないよ、ライン」

「お父様、さっきの件なんだけど…」

「あらあら、ラルー！豆だけ避けて！美容に良いから食べなさいね」

「シャラン！口からまたご飯こぼれてるわよ」

「お前達、そんなに急いで食べると消化に悪い！ゆっくり30回は噛みなさい」

「……………はぁーい」「……………」

ウチのせわしない昼食風景を目の当たりにしたベイルは、始めはびっくりしていたが、すぐにクスクス笑って言った。

「この家は、楽しくて居心地がいいですね。シャランが馴染むのもよくわかります。」

「あら！うるさかったですか？すみませんね……」
苦笑しながらおばーさまが言った。

「いえ。我が家はご飯を食べるのも何をするのも一人の事が多いので、こうして家族が集まって食事をする事がこんなに楽しいとは思いませんでした」

「…こんな食事であればいつでもいらして下さい。」

「そっだよ！いつでも来てまた、手合わせしようよ！」

「サルン伯爵、フィータありがとうございます。是非伺わせていただきます」

心底嬉しそうにベイルは言うと、ゆっくりスープを飲んだ。

それから、ちよくちよくとベイルがうちを尋ねてくるようになった。シヤランに会いに来ると言うよりは、私達兄妹と遊ぶのが主な目的で。

特に皆がハマったのは、ベイルが教えてくれたチェスだった。意外とフィーダが1番強くベイルとフィーダの攻防は三日間続く程、白熱した戦いだっただので最後はお互いにボロボロになって、なんとかフィーダが勝ち「い、イエーイ…」と一声あげてその場で白目になって寝てしまった。

こうして、私達は新たな家族と友達と共にスクスクと成長していった。

その24 (前書き)

ここから新章に入りまーす！ラルーも大人になりました。

その24

「ラルーちゃん、おはよう！」

今日は、頭痛の薬を貰えるかしら？」

「あら、ジャンヌさん。またお祖母さんが？」

「季節の変わり目だとしてもね…ラルーちゃんのはよく効くからさー！」

「いつもありがとうございます。冬も近いので、ミントで作った喉飴も入れておきました。」

「あら、ありがとうございます！これ喉がスッキリして私大好きなの。いつも悪いわね。はい、お金！」

あ、そうだ！今度ケーキ作ったら持ってくるね」

「ありがとうございます。楽しみにしてますね！」

カランカランとドアに付けたベルが鳴りお客様が帰って行った。

さて！次のお客様が来るまでパツとお昼でも食べちゃおうかな！お茶を入れて、朝作ったサンドイッチを広げて一口食べる。パリッとしたレタスとハムのジューシーな味わいがなんとも言えない！

「んまい！」

店の裏で一人、モグモグとサンドイッチを食べているとカランカランとお客様が来たことを告げるベルがなった。

「ホアーヒ！フグ、ヒキマフ」

口の中の食べ物をお茶と共に飲み下して店に出る。

「お待たせしました！今日はどう言ったご用件……ってフィーダ！
？なんでここにいるの？」

「なんでって、5年ぶりに会ったっていうのに冷たい姉貴だな、ラ
ルー！今日行ってくつて鼻に手紙付けて出しておいたけど見てないの？」

「見てないわ！どうせ、フィーダに似て道草してるんじゃないの（
笑）」

私はそう言つと久しぶりに会うフィーダにギュツとハグをした。

「久しぶりのラルーの匂いだ…」

フィーダも私の肩に顔を埋める。「お前、男できてないよな？」

「はあ？何言つてんの？バツカじゃない？」

「その分だと出来てないんだな！よしよし！」

カラン、カランと再びドアが開きベルがなった。

「ラルーちゃん、ステフが切り傷をしちゃって！消毒薬と塗り薬を
…って、あら？あら？いやだわ、私ったら間が悪かったわね、出
直すわ…／／／」

「え！あつスミスさん！違つんです。弟なんですよ、これは」

「え？弟さん？あら、やだ、てつきりラルーちゃんのいい人だと思

「つちやったわ！あら、弟さんいい男ね！私があと20年若ければ言い寄ってたわよ！」

「何をおっしゃいますか、マダム。今も充分お綺麗ですよ」

「フィーダのマダムキラースマイルがスマスさんに炸裂し、舞い上がったスマスさんは、消毒薬と切り傷の塗り薬の他に風邪薬と腹痛の薬を買ってくれた。」

「あんだね…その偽紳士面するのやめなさいよ。」

「これで、ラルーの店の薬が少しでも売れるんだから恩に着るよ」

「うちの店は細々とだけど、ちゃんと売れてるんだから大丈夫です！」

「でも、まさかラルーが人間の町で薬屋やるなんてな…未だに信じられないよ」

「フィーダがまじまじと私を見つめながら遠い目をして言う。」

「サルン家に私達が転がり込んだでから今年でちょうど50年になる。」

「おじいさま、おばいさま、母様に愛情たっぷり育ててもらい興味のある事は、なんでもやらせてくれた。その中で私の心を驚掴みにして離さなかったのが薬だった。」

「いやいや、違いますよ！やばい薬とかではありません。」

「薬草や魔法を使ってできる病気治療の為の薬です！」

何と何を配合するとどんな症状に効くとか考えるだけでたまりません！

薬学に没頭した私は、パチーノの中の薬学の本を読みあさり、薬学の先生の弟子になり薬剤師になった。

おじーさまが薬学に没頭した私の為に薬屋を町に作ってくれて晴れて薬剤師としてデビューしたが、これまたハーフェルフと言う事で私の作る薬は、一向に買ってくれるエルフはいなかった。

そんな時、人間の町に今まで考えられないような薬の配合で多くの人を助けているセドリック先生という人がいるという噂を聞きどうしても会って教えを請いたくてなんとかおじーさまと母様を説得し、1年だけ人間の町に行ける事になった。

セドリック先生は70過ぎのおじいちゃん、初めは私の姿と生い立ちに驚いたが、熱心に薬学の素晴らしさを語る私に根負けをし、弟子にしてくれた。

セドリック先生は、おじいちゃんと思えぬ程、日々研究に熱心に取り組みと共に町の人々から薬屋として絶大な信頼を得ており、遠くの町から薬を求める人達も少なくなかった。

しかし、先生の弟子になってちょうど一年が経った朝、いつものように先生を起こしにいくと先生は、安らかな寝顔で冷たくなっていた。

もともと身寄りが無かった先生は、私に財産と薬屋を譲るのでどうか自分の意思を継いで多くの人を助けて欲しいと遺言書に書いていた。

そこから、おじーさまと母様とおばーさまを説得し、現在サルン家

を離れ薬屋として人間の町で暮らしています。

とにかく、町の人や遠方からくる人が困らないように常に店は開けているので、実家に中々帰れずに5年が経っていた。

その25

「母様：私の事何て言ってる？」

おずおずとフィーダに聞くとニツコリ微笑み何も言わない。

怖い！すんげー怖いんですけど！無理、会っの超怖い！

「ま、みんなラルーの事が心配なんだよ！年末くらい帰って来いって御達示が出て俺が連れに来たってわけ」

「そう簡単には店を開けるわけにはいかないわよ！病気で困ってる人がいつ来るかわからないし…」

「そういうと思っていいもの持ってきたんだ！はいコレ」

そう言ってフィーダが小さな箱を取り出す。

「何よコレ？」

「この箱には、もう1つ同じ箱があって、時空を繋ぐ魔法がかかっているから、この箱に紙で何が欲しいって書いておくともう1つの箱に繋がって紙を取り出せるようになってるんだ。その紙を見て薬を作って箱の中に置いておけば、こっちの箱に薬を届けられるんだよ。凄いだろコレ！ベイルが作ったんだぜ。すんげー複雑な魔法がかかっているらしくて3ヶ月くらい費やしたって言ってた」

「ベイルが！？」

「あいつラルーの事となると昔から目の色変わるから…。これ作

るのも、ろくに寝ないで作ったみたいで、出来上がった瞬間に落ちてたもんな。」

「やめてよ、そういう言い方。ベイルには、シャランがいるでしょ！」

「あいつ、シャランの事は妹としか見てないぜ！目下、王様とその事で言い争いが絶えないみたいだし……」

ドキンと胸が高鳴った。いつからだろうか…ベイルの存在が特別になったのは。ベイルとシャランは、将来が約束されているのは周知の事実なのに、気がつくまでベイルの事を目で追っている自分に嫌気がさした。

シャランは、うちに来てから少しづつだが成長をし、ベイルが成人した時には調度、見た目が10才くらいになっていた。シャランの成長に驚き喜んだ王様がもう少し、彼女の成長を待ってから王宮に來させる事にし、まだサルン家で家族と共に生活をしている。それからしばらく会ってないが、今では美しいお嬢様になっている事だろう。

私は、シャランがいつ王宮に呼び出されベイルと結婚をするのかを毎日ハラハラしながら過ごしていた。そんな生活が嫌になっていた時にセドリック先生の事を知り、少しでもベイルから離れたいという気持ちもあって、人間の町に來た。

もちろん、薬学が好きで極めたいと思ったのも本当。多分、色々な意味でタイミングがよかつたんだらうな…

今では、この生活に大満足だ！

「んじゃ、ラルー！さつさと支度して帰るぞ」

「ええ、今から？無理よ！今やってる研究を止めるのも、すぐには無理だし、箱の事だつて町の人に言っておかなきゃ！あと、帰ったら、箱の前で注目が来る事を待つ暇なんて無いだろうから、必要な薬を作り置きしておかないと…」

「ブハツハハ！ラルーは昔っから、真面目だな。そう言うと思ったよ。だから俺が来たんだつて。ホラ店番しといてやるから、お前はやらなきゃならない事をやって来いよ！」

ニヤニヤ顔のフィーダが私を面白そうに見下ろす。

テメー調子に乗りやがつて…

目にも見せてやる。

それから、フィーダでも扱えられる作り置き薬の説明をした。

「それじゃ店番よろしくね、フィーダ！大好きよ」

そう言つて、フィーダに抱き着く。ただし全体重はフィーダの片足の上。

「イイツツタアー」

「じゃあ姉様は、やらなきゃならない事をやるために、店の裏に引っ込むけどなんかあつたら言いなさいね」

悶え苦しむフィーダを後にして、店の裏の研究所に引っ込んだ。よっしゃ！報復成功！

「 6 時間後 」

「 あー疲れた！ ラルー夕食にしよーよ 」

「 わかった！ もうちょっと待ってて！ あ、ドアのノブに本日閉店の看板かけといて！ 」

「 ハイハイ… 人使いの荒さはオフクロ譲りだな、全く。 」

フィーダが渋々ドアノブに看板をかける。 まあ、閉店と書いていても急患の場合は、ドアベルを鳴らしてもらおうように看板の下に書いてあるけどね。

私は、研究を一旦ストップするための作業を終えて、大食いのフィーダの為に夕食を作っている。

「 出来たから、こっち来て 」

「 はあー腹減った！ おっ上手そうだな！ いただきまーす！ っ！ これめちやくちゃ美味しい！ これは何？ 」

「 それは、ここの名物料理でピコナっていう麺料理よ 」

「 へえー！ 初めて食ったけど、スゲー美味しいよ！ 」

「 っじゃ、これも食べて見てよ！ 肉団子だよ！ 」

まぐまぐまぐ… 「 う、うっめえー！ これクラス達にも作ってやってよ！ すっげー喜ぶから 」

「 あら本当？ うれしいわ！ これも食べてみて 」

フィーダの美味しそうな顔を見ると、久しぶりに自分以外の誰かと食事をしている事実が気がつく。

もともと、料理を作る事は大好きだったから、先生が生きてた時は先生の為にご飯を作り、一緒に食べていたけど、一人ぼっちになつてからは、自分一人の為に料理を作る事が面倒で、朝は果物とコーヒーで軽く済ませ、昼は朝作ったサンドイッチを食べながらみ店番をし、夜は研究や薬作りに没頭して、食べない事が多かった。

だから、久しぶりの来客が嬉しくてテーブルいっぱい料理を作ってしまったが、フィーダが片っ端から平らげていく。

「ラルー、お代わりある？」

「あるけど、あなたのお皿に山盛りを持ったから、少ししかないわよ！ちよつと待っててね」

お皿を持って席を立つと顔が綻んでいる自分に気が付く。

（こうして家族が集まって食事をする事がこんなに楽しいとは思いませんでした）

ふと昔、ベイルが言った言葉を思い出す。あの時は、よくわからなかったけど、いまでは痛い程わかる。当時のベイルは、今の私よりも幼かったのに、もうそんな事を知ってしまったと思うと胸が締め付けられた。

「ラルー！まだ？早くー」

ダイニングでフィーダからご飯の催促の声が飛んで来る！

人が感傷的になつてる時にあの男は……

「ちよつと待つてなさい食いしん坊!! すぐ行くわ!」

「なんだよ! 怒るなよ」。ラルーも一緒に食べよ!」

甘い笑顔でフィーダが見つめて来る。

ムカついが、ついほだされてしまう。

「別に怒つてないわよ! はい、お代わり。んじゃ、私も食べよつとつてアンタ殆ど無いじゃん!」

「あ、上手かったからつい…、良ければコレ食べる?」

とさつき渡したお代わりのシチューをくれようとするが、それも1/5くらいしか残っていない。

「こんのー食欲魔人め! せっかくデザート作ったけどフィーダにはあげない!」

「そんなあ、ラルー姉様! 優しい優しいラルー姉様お願いだから、デザート取り上げないで」

上目遣いのキラキラ眼差しで見つめられると無視できない。

仕方なく作ったケーキを出して お茶をいれている間にフィーダがワンホールの7/8程、食べていた。

勿論、ボコボコにしてやったのは言つまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5121x/>

ハーフェルフの憂鬱

2011年11月3日23時49分発行